

路を通じ、財政を整理し、新貨幣を鑄、旗本を賑恤し、朝鮮  
信使の聘禮を改制し、消防組の制を定め、水利を理め、馬匹  
を改良し、大嘗會を再興し、水練水馬武術を勵まし、屋上制  
限を設け、風俗の紊れたるを正すなど、其治政の改良は數ふ  
るに違あらざるほどであつた。其の幕政の擧がつたのは前後  
に絶すると云つてよい。

將軍吉宗の言行を見聞くと、洵に其の一代の傑物にして、  
幕政の善く擧がつた所以が了解される。江戸幕府は斯くして  
鞏固となり、斯くして緊張し、斯くして強大となり、斯くし  
て隆盛となつたのである。其時代を觀んとするには其言其行  
を見聞くに如くはない。彼の物語を筆記したものゝうちに斯

う云ふ訓言が載せてある。

人の生涯勤むべきは忠孝の二道なり。聖賢の千言萬語も皆  
このためなり。

忠孝をせんとならば、主君、先祖、父母の恩を常に忘るべ  
からず。

親に事ふる孝行の次第は品々あれど、畢竟は奉公に精を入  
れ、身の言行を慎み、養生をよくし、父母を安堵せしむる  
をよしとす。

兄弟は互に睦じく、兄は弟を子の如く、弟は兄を親と敬ひ  
心に應せざる事ありとも堪忍して眞實を盡すべし。

夫婦の間は少しの事より不和になるものなり、妻を離別す



五三  
 るは人倫の變なり。その妻誠に僻事ありとも、互の一族思  
 ひうとむほどの事ならば、離別はすまじきものなり。  
 朋友に交るには遠慮をもとすべし。如何に親しき中たり  
 とも、遠慮を忘るれば不慮の難儀出来るものなり。  
 常に打より語らふにも上の事批判すべからず、傍輩の事誹  
 るべからず、愚なるものを侮り輕すべからず、人の隠す事  
 を見聞すまじ、人の秘藏するものを所望すまじ、かりそめ  
 に約束したる事を變すまじ、なるまじき事は初めより約す  
 まじきなり。偽を云はんとはせねど、詞多ければ思はぬ偽  
 も云ひ出す事あるべし、人々詞少きを善しとす、衆人の中  
 には別ての事なり。又其人の忌み嫌ふことは推察し、其

人の前にては云ふ事なかるべし。されど我身に非義なくて  
 時に應じ義の爲に身を棄つるは武士の習なれば、此限に非  
 ず。  
 家人は功績あるものゝ子孫、己が心に應せずとも祿を削る  
 べからず、己が心に應せりとも、一身の寵をもて高祿を與  
 ふべからず。  
 奴婢の類は大かた理を辨へぬ者なれば、能く教諭して召使  
 ふべし。飢寒を察し、艱難を救ふ、これ下を恵むの要道な  
 り。  
 不慮の福あれば不慮の禍あり、諸事我身の爲を思ふべから  
 ず、義に當るか否かを思ふべし。



苦をのがれんとすれば義に背く事多し。  
人毎に過失はまゝある事なれば恥にあらず。我が過失を人のことに云ひなせば不義なり、人の過失を我身に引受くるは義なり。

一事をなさんとせば、初より其害を防げば後悔なし。

人の疑を受くる事は初めより言はず爲さざるをよしとす。

わけて短氣なる性質の人慎むべし。

我身性急なりと知らば堪忍を心に思ふべし。短氣はもと我

儘より起るものなり。

士の口と書いて吉の字なり、士の心とかきて志なり。され

ば士の口は容易なるべからず、士の心はいよく容易なる

べからず。

常に人の善惡を見て己が鏡とし、私欲なく驕らず禮義を守

るべし。家宅諸器物衣服なども分限より不足なるはよし、過分なる

は惡し。

すべて儉約を守り、美麗を好まず、浮費を省くべし。儉約

と云ふものは我身の不自由を堪忍するより起る事なれば、

我が面白きと思ふ事は度々重らざるをよしとす。

文學は忠孝の道を學ぶためなれば、人々身の分限をも知り

て禮讓を旨とすべし、詩歌作文などを専らに心高く世を厭

ひ、隱者の風など好ましくなれば、忠孝のつとめおろそか



になるものなり。忠孝を棄て、は無益の學問にして、世諺  
 にいふ論語よみの論語知らずといふものなり。  
 又嘗て斯う言ふことを云つた。  
 なまじいに學文せしものは、政事を委ねがたきことあるも  
 のなり。わきて長崎の奉行など、あしく心得れば、唐をの  
 み尊く思ひあやまることあり、すべて書を読む人多くは唐  
 を好み、やゝもすれば國體を失ふ事出来るものぞ。  
 と、其識見は高く、廣く眼を海外に曝らし、殖産興業に力を  
 致して、外國の藥種を求めて之を培養し、外國の文物を吸收  
 することを忘れなかつたと同時に、國體を尊重し、國本を養  
 成さすることをつとめたのである。

此時代は連年豐作つゞきで米の値が安くあつたから、天下  
 吉宗を稱して米將軍と申した。諸藩には前田綱紀のやうな名  
 諸侯も出で、學問は都鄙到る處に盛となつた。元來江戸幕府  
 は初代の家康が馬上で天下を取つたが、生來の學問好きの爲  
 に學問を奨励した。五代將軍の如きは身親ら經書を講じて諸  
 士に聽かしめる。それに吉宗が實學を奨励したと來たから學  
 問熱は上下に普及したのである。しかし斯う學問が奨励され  
 ると、従がつて國體のことを論じ、歴史の觀念を養ひ、大義  
 名分論の素養を作るに至るのは、自然の勢である。已に元祿  
 時代に古典の研究が盛となり、大日本史の編纂が始まり、彦  
 九郎生後十一年には竹内式部の追放があり、學問普及の結果



はどうしても幕府に疑を抱かすやうになり、従つて王室の恢復に志すやうになるのは偶然でない。彦九郎は時代の先驅者であつたが、又時代が作つた一の産物である。

しかし彦九郎の生れた時代は幕府の隆盛時代である。幕府の基礎は益々固くならんとしつゝあつた時代である。學問奨勵の結果は漸く大義名分の萌芽を生じたに相違ないが、まだほんの種子芽生に過ぎぬ。之を江に譬へると、觴を濫べる岷山の水に過ぎぬ。大義名分論も學問上の大義名分論である。空論の尊王主義、机上の尊王論で實行の尊王主義尊王論ではない。天下は滔々として江戸幕府を謳歌して居る、昏昏として太平の春に酔つて居るのである。此時に當りて彦九郎は曉

の鐘を亂打したのである。是に至つて尊王論は學者の尊王論でなくして、方に天下の輿論とならんとしたのである。之を斯くなさしめたのは、高山彦九郎其人の力である。

彦九郎は少時太平記を愛讀したと云はれて居る。新田郡に生れた彼が新田氏の事蹟に富んだ太平記を愛讀したのは如何にも爾かあるべきことと思はれる。

太平記は理盡抄と云ふ書物に依ると、初卷から十卷までは玄慧法師、善知法師、敬圓上人、結隣等が當時の名將忠臣に問ひ糺して其實際を描寫したものであるとあるが、此説は如何であらう。唯だ此書が當時即ち南北朝時代を遠く離れない頃に出來たと云ふことは、今川了俊の難太平記で分る。難太



平記は應永九年の作で、太平記の誤を正すと云ふ見地から著されたものであるから、此書が應永九年前の作なることは分明である。洞院公定公記には此書の作者を小島法師としてあるが、これも確説だかどうか。よしや確説にした所が太平記作者の一人であらう。此書はどうも一人の手ではないらしい。しかも其作者達は叡山の僧侶であつたらうと思はれる。つまり南朝に同情ある法師達の作と見るのが穩當である。華やかな文章で國民精神が最も善く發揮した時代の變遷状態を述べたのであるから、讀むものは自づと心臓の鼓動の高まるを覺える。

太平記讀と云つて、今の講談の先驅なる太平記の講釋が起

つたのを見ても、此時代の壯烈悲痛なる有様は國民の血潮を沸かしむるに足りるのが分かる。眼に文字あるものが此書に親炙すれば、正成義貞等の忠臣義士に滿腔の同情を捧げ、尊氏直義等を蛇蝎視するに至るは自然の情である。南北朝時代に於ける吉野朝廷君臣の行動心事は、最も美しい國民血液の結晶である。之に感憤せざるものは我が國民に非ず、否寧ろ人間にあらずと云はねばならぬ。

一部の太平記の史實を疑ふものがあるが、其の小部分に就ては多少の誤謬非難を免れないしろ、大體に於ては能く其委曲を盡して居る。若し此一部の名作が人間に存せすとならば、我等は終に南北朝史に通ずることが出来ぬ。國民の血潮



を沸かしむることは無論出来ぬのである。太平記は我が國民の教科書である。我が國民は誰しも之を一讀せねばならぬ國民精神史である。若し天下中最も感化力に富める著書は何なりやと問はば、太平記が其の一たることは無論疑ふべからずである。

江戸幕府の學問獎勵は太平記をして復活せしむるに至つた。大日本史となりて現はれ、日本外史となりて現はれ、中興鑑言となりて現はれ、湊川の楠公碑となりて現はれ、小楠公髻塚碑となりて現はれ、南北朝の忠臣義士は人心に新生命と新血液とを賦與した。まして其原本の太平記を讀むものは如何ばかり興奮したであらう。殊に南朝忠臣の隨一なる新田氏の

故土に生れた高山彦九郎が此書に依りて發憤したことは蓋し思半に過ぎるものがあらう。

南朝の忠臣義士は高山彦九郎となり、事實となりて復活しついで維新大業を翼賛した志士となりて復活した。而して國民のあらん限りいつにても復活することが出来る。南朝忠臣の血は徒らに瀝いだものでない。高山彦九郎の呼號は徒らに大聲疾呼したものでない。いつにても國民は之と感應共鳴し得るのである。

### 四 風 采

彦九郎の事蹟を集めたものには高山操志があつて此偉人に



關する詩文を網羅して居るが、彦九郎自分の手に成つたものは一つもない。有名なる江戸日記、京日記、鎌倉日記等の日に乗に關しては何等の記する所もない。高山操志に彦九郎の傳があるが、多くは他人よりの又聞きであるから、其記者に依りて記する所が各々相違して居る。例へば頼山陽の書いた傳には「人となり白哲、精悍、眼光人を射る」とあり、齋藤拙堂の傳には「人となり短小精悍、哲なること女子の如し」と書し、杉山忠亮の傳には「長八尺餘、鬚髯神の如し」と記し、鹽谷宕陰の傳には「其人身短にして哲」と叙して居る。同じ人を傳して或は短小と云ひ、或は長大と云ひ、一は哲なること女子の如しと云ひ、一は鬚髯神の如しと云うて居る。此う

ち杉山氏の傳は最も詳で、「安藝の頼襄嘗て其傳を著す、襄は嘗て文章を以て關西に名あり、傳を立つるの意も亦凡ならずとなす、然れども其の傳聞する所は闕遺なき能はず、憾むべしとなす」と云つて居るから、山陽の叙事を補はんとして居るのである。しかし乍ら猶「吾是を以て平昔父師に聞く所のものを叙し、天下後世をして考ふる所あらしむ」と稱して居るから、又聞きである。故に、實際に其人を知つて居る人の記事に依て之を正して見ねばならぬ。

菅茶山は「余二十許りの時、來りて一宿す」と記して居るから、茶山は實際彦九郎に面會して、其人となりを識つて居るのである。此實見した人は彦九郎の容貌を叙して、「其人鼻



高く、目深く、口廣く、丈高く、總髪なり」と云つて居る所  
 を見ると、拙堂や宕陰の短小説は誤であつて、杉山氏の長八  
 尺餘の説が事實らしい。勿論此八尺餘も今の日本の尺度では  
 あるまい。漢文流の八尺餘であらうと思はれる。柴野栗山も  
 送高山生序を書いて居るから、此人も實際交際した人である  
 が、「身長八尺、高髻梁に挿す、面紅玉の如し」と云つて居る  
 ところを見ても、茶山の記事の正しいこと、杉山氏の傳の誤  
 りをらぬことが分明である。眼光の鋭かつたことは、諸傳俱  
 に同じく、又音聲の大なりしは或は鐘の如くと書し、或は雷  
 霆の如しと叙して居るから、之も間違ひでなからう。宕陰の  
 傳には、

人戯れに、其叱咤を試みんことを求む。正之命じて陶器を  
 棚に列ね、柱に倚り、一呼すれば、陶器盡く振ふ。野を過  
 ぎて群盜に遇ふ。正之目を瞋らして之を叱して曰く喝と。  
 賊震懼却走し、半影隻踪なし。  
 と記して居るが、此群盜震恐説は杉山氏猶之を詳かにして、  
 文明の季年、京師災あり。正之之を聞き、晝夜兼行し、馳  
 せて京に赴く、夜木曾山中を過ぐるに、賊數人あり、刀を  
 抜いて正之を脅かさんと欲す。正之目を瞋らして叱して曰  
 く汝、上野の高山彦九郎を知らざるか、今天闕に災ありと  
 聞き、馳せて之に赴くなり、汝輩豈我が刀を汚すに足らん  
 やと。賊皆懼伏す。後、巨賊大阪獄に繋がれ、自ら平昔を



語り、未だ嘗て恐怖する所あらざるも、嘗て木曾山中に在り人を要して劫をなす、一丈夫に遇へるに、目を瞋らして我を叱せり、之を憶ふに、今猶股慄するが如し、彼自ら高山某と呼べり、所謂天狗なるものか。  
と書いて居る、が茶山の「筆のすさび」の記事は大分相違して居る。

それより播磨に赴き、姫路の北郊に相識の人ありて一宿す、翌日晩際に暇を乞うて出でんとするを、主人留めて、時は節季なり、日は暮かれば明朝立たれと云へども、但馬に行きて、年内に京へ出で内侍所の御神樂を聞くに、日數限あればとて強ひて出でしが、扱其翌春かの姫路北郊の百姓

に罪ありて獄に入り、其の赦され歸りて、獄中の事ども語る中に、山賊と同じ獄に在りて、いろ／＼の話に、賊を多年なして深山に夜を明し、恐しき獸などに逢ひしや、又天狗など云ふ者を見しやと問ひしに、賊の云へるは、十餘年山に棲で一度も怖しき者を見ず、只一度ありし、去年何某月何某夜、何某の山中に佇み、人を待ちしに、大なる男一人出来たるを見て、吾等四人立塞がりて、酒錢を乞ひしに其人高音にて慮外者めと叱りて、傍に人なきが如し、のこ／＼として過ぎ行きしかば、四人は各々尻もちつきて暫く物も言はざりし、其聲の大きき山に響きて凄じく、やゝあつて其人を見れば、半町許も行き過ぎて跡を見返りし眼光



りて恐しき事限りなかりし、是こそ天狗など云ふものにて  
 もありつらめと云ひし、其賊の顔も恐しげなりしと。此事  
 を彼主人聞いて、月日を數へ、其時刻と其他を考ふるに、  
 其人は必ず彦九郎ならん、かの山中を節季の夜半に一人過  
 ぐる人外にはよもあらずと舌を巻きしよし。  
 一は天明の季年と略々其時を書いて居るが、一は其年を記  
 して居らぬ。一は京都の火災に駆けつけたことがあるが、一  
 は内侍所の神樂を見ん爲に上洛したとある。一は木曾山中と  
 あるが、一は播但の山中とある。一は自ら高山彦九郎と名乗  
 つたとあるが、一はあとより推測して、それであらうとして  
 ある。此説のどちらが正しいかは他に傍證を求めねばならぬ

が、どうも茶山の方が正しいやうに思はれる。杉山氏は水戸  
 の人で、彦九郎が水戸の才俊と多く交り藤田幽谷などは忘年  
 の友であつたから、杉山氏は此等の先輩故老から聞いたので  
 あらうが、傳聞は傳へ傳へるうちに誤が生じ易い。木曾山中  
 など如何にも山賊の出る幕にはふさはしいが、實際はどう  
 であつたらう。播但の方が作話でないらしいではないか。し  
 かし新聞紙の三面記事を見ても、同じ事柄が幾様にも新聞紙  
 に依りて異つて傳へられるがやうに、一つ話でも色々に傳へ  
 られるもので、山賊だから木曾山中であつたらう、勤王家彦  
 九郎のことであるから宮闕の火災に奔つたのであらうと誤り  
 傳へられるも無理がなからう。之から見ると、播但の山中と



云ひ、内侍所の神樂拜見の方がどうも自然であるやうだ。又彦九郎がよし名乗つたにしても、それを山賊が記憶して居るのも變である。後世になつてこそ高山彦九郎は有名であるが、其頃ではこの馬の骨だか牛の骨だか知らぬ人が多い。まして縁もゆかりもない山賊がいつまでも郷里と姓名とを覚えて居ると云ふのは事實らしくない。しかし之に依つても彦九郎の大聲と眼光の鋭かつたのは分明である。又如何に聲が大きいにしろ、眼が鋭いにしろ、小男では天狗と間違へられることはない。どうしても丈拔群の大男であつたには相違ない。山陽の傳にも之と異曲同工の逸事が載つて居る。江門の人關龍、豊前の人、梁又七の輩最も親善なり。天明季年歳飢

る、所在盗起り、上野も亦靖からず。正之袂を奮ひ起て曰く、吾郷をして此不良事あらしむべからずと、往いて之を理めんと言ひ關龍に辭す。關龍之を援けんと欲したるも、正之は欲せず、贈るに衷甲を以てす、之を受けて獨行して板橋驛に至る。時已に夜なり、二男子あり、橋上に在りて相嚮ひて臥す。兩尻高くして頭凹む、正之念ふに、踏まずんば行くべからずと、之を患ふ。已にして曰く、是れ官道なり、彼之を塞ぐは無狀なりと、凹處を踏みて過ぐ。其人蹴起し、並に叫で曰く、誰か吾頭を踏めるものぞと、刀を抜き鋒を連ねて追撃す。正之顧みて睨みて曰く喝と。其人辟易敢て迫らず、遂に往て郷に至り、一旅店を過ぐるに喧



呼して酒を飲むものあり。即ち關龍と又七と徒を帥の途を異にし先づ往き、事平ぐるに會ひて、會飲するなり。正之を呼び同じく酔ひて俱に還る。後官劇賊の渠帥を獲たるに、自ら語る、平昔未だ嘗て難當漢に逢はざるも、嘗て板橋に在りて人を要し、劫を行るに一眇丈夫に遇ふ、目を瞋らして吾を呵す。之を憶ふに今猶股慄するが如し。此文は前二文と大分相違して居るが、出所は一つで斯う色々に傳つて居るのである。上野の一揆のことは事實で、茶山の『筆のすさび』にも、

彦九郎江戸に在りし時、新田のあたりには百姓一揆起りしと聞て、取るものも取りあへず、急ぎ歸る頃は未過ぎ申の時

刻なりしが、相識人のもとに立よりて、其人の妾にしかじかと語りて出づ。其夫の歸るを待ちかねて其由を云ふに、其夫驚きて、夫は聞捨にならず、彦九郎は正直にて氣はやき男子なれば、事によりて命を捨んも計りがたし、吾は是より追付て事を計らん、汝は誰彼にも告知らせよと云ひつ出にけり。夫より人々に云ひつぎて追々て慕ひ行くほどに、凡同志の輩三十人許、夜道を厭はず、路程二十里餘りに彦九郎は翌早く駆つけ、外も追々半時ばかりに追付集りしが、一揆は既に治りしかば、晩に打連て江戸へ歸りし由頼萬四郎其頃江戸に在りてくはしく其事を知りて此輩亂世に在らば一方をふりむけて、大功を立つべしと時々語りて嘆



稱す。

頼萬四郎は杏坪のことで、即ち山陽の叔父に當る。山陽は恐くは彦九郎の傳を此叔父と師事した菅茶山から受けたことと思はる。そこで山賊の話と上野の一揆との話は混線したのではあるいか。

斯う云ふやうに、諸傳まちくであるが、彼此對照すると其容貌軀幹は略々推定が出来る。鬚髯神の如しと、前掲の傳中にもあるが、杉山氏の傳には獨一層之を具體的に示して、竟に去りて水戸に至り、立原萬、藤田一正及他の有名の士を訪ひ、留ること數日。一日萬人に謂て曰く、活雲長來る、子往いて之を見よと。正之は鬚髯に美なり、故に萬戲るに

此を以てす。

と。然るに高山操志の口繪には無鬚髯の肖像が出て居る。しかし之は或時は有鬚髯でもあつたし、或時は無鬚髯であつたとも云はれる。必ずしも強ひて詮索せずとも可なりである。單なる容貌に就ても是等の異同があるから、従つて其事實には幾多の相違があるのは免れがたい。彼が正確なる史料として自筆の日乗に依るのが最も宜しいのである。此日乗は往年其一部分の江戸日記が自筆の儘で木板に鐫られた外他に刊行されたものがない。最も近日江戸日記を読み易く鏤刻し、之に註解を施したものが、出る筈にはなつて居る。しかし其他のものは總べて信州の矢島氏の所藏に歸して、容易に他の



披閱を許さぬ。若し此等の日乗を總べて讀だならば、彼の眞正なる傳記を描くに極めて便利で、又極めて確實であらうと思はれる。

彦九郎は氣の人であつた。氣の人であるが故に情の人であつた。激し易い、慷慨家であつた。家に在つては孝子慈孫であるとしも、外にては忠君至誠の人であつた。日本男子であるとしも、又關東男兒であつた。關東男子は由來熱し易く、激し易い。上州は忠烈なる新田の一族を出したばかりでなく、俠骨ある國定忠次の徒を出した處である。上州長脇差の語を以て其俠的方面を説明して居るものである。上州は必ずしも空つ風と焔天下ばかりの地ではない。赤城風は野を吹き

森を吹き、川原を吹き、家を吹く。農桑の盛んな、機業地であるから従つて女の自活を營むものが多く、遂に此の俗諺をなしたこと、思はれるが、又俠義の風ある地方であつた。彦九郎の如きは最も大なる俠者であつた。彼の俠骨は長脇差のやうな小さな俠でなくて、君國に向つて其生命を捧げて悔いざる大俠であつた。

### 五 家 庭

彦九郎の家は世々農家である、しかし杉山忠亮の傳に依ると、其先祖の遠江守某は新田十六騎黨の一で、建武の亂には左中將義貞に屬して居たと云ふのである。それで子孫は農業



を事として居たが、猶常に雙刀を佩びて居たと云ふ。祖先の傳右衛門は幕臣筒井與次右衛門に仕へて地方用役を勤めたと云ふことであるから、地方の幅利であつたに相違ない。杉山の傳に依ると、父を良右衛門と云ひ、非常に力強く、外出する毎に必ず僕をして弓矢を負はしめ、數々山野に遊獵して猛獸を射殺すとあるが、之はちとおまけかも知れぬ。彦八と云ふのが其父の名であつたが、或は後に良右衛門と改稱したかも知れぬ。母は繁、武藏幡羅郡臺村の人劍持重左衛門の娘である。

彦九郎の父母は早く歿して、彼は其祖母に養育された。餘程其恩を感銘したから、後年祖母の憂に丁りては三年間家側

に慮して喪に服したのである。此ことは彼の至誠を見るべき一の顯著なる例で、末世に奇らしいことである。山陽の傳には誤りて母となし、

母死して家側に慮すること三年、饘粥給せず、骨立して枯木の如し。

とあるが、之は祖母のことである。杉山の傳に、嘗て祖母の憂に遭ひ、鞠養の恩あるを以て、再期の喪に服せんと欲す、其兄之を止む、正之聽かず、叔父長藏と家側に慮すること三年云々。

とあるのが正しい。鹽谷宕陰も山陽の誤を受けて、母の喪に家側に慮する三年、哀毀して骨立す。



と誤聞を傳へて居る。然るに又之と異つた誤傳を立てるものがある。彦九郎が三年の喪をなしたのは、其祖母の爲めでなくて、祖父の爲めであつたと。しかし之も母と同様間違つた談である。彦九郎と同時の樺島世儀が贈商仲繩序にも、嘗て其祖妣を喪ひ、冢上に廬する四年。とあり、忘年の友なる藤田幽谷の祭高山處士文にも、惟子、王母に供養し、湯藥に侍して倦まず、喪に服し、冢に廬する三年、實に今世に鮮きところ、其の祖妣に於ける孝敬斯に至る、云々。

とある。又杉山忠亮の書高山處士眞蹟後にも、昔寛政中、余、下總結城寺の僧瑞岳なるものと邂逅し、語

處士の事に及ぶ。瑞岳余が爲に言ふ、某昔年上野に到り、新田郡細谷村を過ぐるに、偶々墓側に廬するものを見る、其人形容枯槁、藁を藉きて地に座し、繩を以て棚に架し、書數十卷を置き、余を呼び入れ、因りて言ふ、某は高山氏、彦九郎と稱す、幼にして孤に、祖母に頼りて鞠育せらる、不幸にして亡し、情忍びざるところ、爲に喪に服すること再期、大祥既に過ぎて、餘哀未だ盡きずして猶此に至るのみ、先祖母平生酷だ酒を嗜む、故を以て日に之を墓前に供し、行人を呼び之を飲ます、今日上人の過ぐるを見る、願はくは一杯を舉げよと。某酒性なし、從者をして之を盡くさしむ。處士又云ふ、先祖母已に天年を以て終る、郷園の



こと以て念となすものなし、今より以後は將に天下を跋渉し以て平生の志を償はんとするなり、天若し、良縁を假さば或は再會を得んと。因りて筆を援りて郷貫及名字を書し、某愛藏して以て今に至ると。時に余瑞岳の爲に周旋するあり、深く之を徳とし、遂に之を以て贈るをなす、是れ余が此蹟を藏する所以なり。

とある。日記を見ても、祖母の爲に精進をしたり、潔齋をしたことが屢々見える。此祖母は餘程長壽であつて、其歿したのは天壽を全うしたのである。藤田幽谷の詩に斯う云ふのであるのを見ても分かる。兎に角八十八歳以上で歿したのである。

小子嘗聞高山君之奇節、以未得見爲憾焉、頃因赤水先生有其王母壽詩之求、聊呈蕪章、併賦之奉呈、

聞君高節一心雄 奔走求賢西又東  
遊學元懷奇偉策 正知蹈海魯連風  
奉壽上野高山君王母八十八初慶  
階庭玉樹紫蘭肥 孫子稱觴獻北闈  
膝下醉歌塵外興 香風時捲老萊衣  
此他祖母に關したものは、藤江致遠に、

高山兄爲其王母乞茶、茶本藩所製、香味頗佳、携來不多、纔贈小囊、

曾將菟道綠雲芽、移植蒼龍野水涯



不是豪華醒爛醉 小囊忻贈孝孫家  
と云ふ詩がある。彦九郎の日記其他にも祖母のことは云つてあるが、祖父のことに乏しい。之で見ても彦九郎が如何に其祖母の恩に感じて居たかは分明である。太田南畝の假名世説に、

上州新田郡の邊に高山彦九郎といへる者あり、いとけなき時、父母に離れ、祖母の養にて生長しけるが、もとより學問を好みて、祖母によくつかへしに、祖母やみて死せり、その時三年の喪を行はんと墓所に藁屋を造り、其中に入りて暑寒風雨をも厭はず籠り居たりしを、或人間ひけるに、祖母の喪にかくの如きは禮にあらざるべしと云ふ。彦九郎

云はく我幼なき時に父母に離れてより祖母の養育にて人となりたれば、父母の恩は祖母にあり、然る故に、かくは侍るといへり。彦九郎に一人の男子あり、六歳になりけるが、喪中に父の側に在りて、

喪屋に居て雨のはらく落くるは

あはれぞまさる涙なりけり

藤衣ころも寒しと風吹けば

木の葉ちりゆく音ぞかなしき

未だ物書くことを知らざれば姉にぞかゝせけると彼の國の人の物がたりなりき。

とあるが、此歌のことは高山操志にも辨じた如く高山彦九郎



正之其人の詠である、冢側に廬して居る間に毎日歌を詠んだのである。

あはれ身を喪屋の古るやになきあしの

過ぐるも早き月日なりけり

うちませにつく／＼おほひ入合の

鐘は昔にかはらざりけり

のやうなものが澤山傳つて居る、今以て當時書いた歌が諸所に散亂して哀孫正之と書してある。

彦九郎には一人の兄がある。名を専藏と云ふが、此人は至極つまらない平凡極まつたものである、否平凡よりは寧ろ善くない性質ではなかつたかと思はれる。それは彦九郎と甚だ

仲が悪かつたと云ふことで爾か想像されるのである。藤田幽谷の祭文中に、

兄弟の撰を異にせる、人心の面の如きを奈んせん、既に棣蓼の芳を聯ぬるなく、鶺鴒の原に在るを嘆く、其の祖妣に於ける孝敬斯に至る、豈獨り同胞に友愛存するなけんや。

とあるのを見ると、其間に同胞の情がなかつたらしい。棣蓼の芳を聯ぬるとは、詩經の小雅常棣篇に、

常棣之華 鄂不韡々 凡今之人 莫如兄弟

とあつて、兄弟の情の美しいを云つたものである。又鶺鴒の原に在るとは、同じ常棣篇に、

鶺鴒在原 兄弟急難 每有良朋 況也永歎



とあつて、急難の際に兄弟相救ふの義である。然るに此兄弟の間には此情の美が缺けて居た。彦九郎の如き情に熱し人が其兄弟と相悪しかつたのは、畢竟其兄が甚だ宜しからざる性質であつたからである。専藏が獨り凡骨のみでなく、小人であつたことは歴然として明かである。

此家側に服喪したること、兄弟の睦しからざることは相關聯して、彦九郎が遊歴の原因になつて居るやうだ。山陽の傳にも、此喪のことありて、

事聞えて官之を旌せんと欲す、其郷俗博奕健訟を喜び、素正之の爲す所を嫉みて、吏に誣告し、之を獄に繋ぐ、獄胥之に食はすも、食はず、已にして出づるを得、即ち家を辭

し、四方に遊び、豪雋奇傑の士を求めて之と交はる。

とある。鹽谷岩陰の傳にも、

事聞えて官之を旌せんと欲す、上毛の俗もと驚にして、博奕健訟を喜び、常に正之の爲すところを嫉み、官に誣告し、之を獄に繋ぐ、獄胥食を給するも、食することを肯せず、既にして出づるを得、即ち劍を杖き、四方を周游す。

と同様のことが云つてある。杉山の傳は之を一層詳にして、事江戸に聞ゆ、有司之を旌せんと欲す、會々正之を中てんと欲するものあり、兄に友ならざるを誣告す、有司も亦其人の常に異なるを以て、召して之を詰つて曰く、庶民の刀劍を帶ぶるは、國に定制あり、汝畝の中に居りて雙劍身を



離れざるは抑も何の義ぞや。正之對へて曰く、某、高山遠  
 江守より以來、二十餘世、未だ嘗て一人の刀劍を帯びざる  
 ものあらざるなりと。有司其言を奇とし、且つ其の磊落他  
 なきを憐み、因りて之に謂つて曰く、汝官に仕へんと欲す  
 るか、業とするものは何ぞ、技撃かはた儒學か。正之曰く、  
 士は貧賤なりと雖も、身を以て人に許すは豈容易ならんや、  
 君子の仕ふるや其義を行ふなり、道の行はれざる、豈一毫  
 爵祿を擢取するの心あらんや、且つ學は人倫を明にする所  
 以なり、士の道に志すものは豈盡く儒者ならんや、其平生  
 好で書を読む、然れども初めより未だ嘗て文士を以て自ら  
 名あらんと欲せず、故に書生の章句を治むるに倣はざるな

り、又幼にして喜で劍を撃つ、然れども技藝もて身を立  
 んとするはもと欲する所にあらず、故を以て亦竟ふるを肯  
 てせざるなりと。有司微笑して曰く、汝の言ふところを以  
 てすれば、汝も亦仕ふるを欲するもの、たゞ之を求むべか  
 らざるの日に求めざるのみ、汝は文學者流にあらずと雖も  
 亦道を以て自ら任ず、儒と謂ふべし、試に大學を講せよと。  
 正之之を講ず。有司曰く、果して其所名に負かずと、竟に  
 之を釋す。是よりして正之遂に家を辭し、日に游歴を事と  
 し、將に以て齒を歿せんとするなり。  
 とあるが、此事實はどこまで眞實かは一寸分らぬ。しかし幽  
 谷の祭文の前のつゞきに、



噫、彼の人、好で人の悪を成し、爰に郷議の愈々喧しきに罹り、四方に遊び、志を桑弧に償はんと欲す、宅一區、寧ぞ身を田園に終へん、嗚呼子は匡章に類するあり、自ら吾賢の孟軻にあらざるを痛む、禮貌交々接し、他日の冤を雪がんと欲し、獨行異調、固より時俗の能く知る所にあらず。とあれば、冢側の一件は官の旌表を得んとしたが、却つて郷黨小人の嫉忌を買ひ、家庭の不調和は一時奇禍を買はんとしたと見える。それで平生四方の志を事實に現はすことゝなつたのである。

彦九郎は郷里にあつたときどれほど學問したか、十三歳の時、太平記を讀で中興の忠臣が志業の遂げざるを見、慨然と

して憤を發し、功名の志ありと云ふことであるが、當時村内に居住して居た播州の人河野忠右衛門、字を子龍と稱した人に従つて讀書を稽古したと云ふ説がある。しかし彼は固より之に満足しなかつたから、十八歳の時一たび郷里を飛び出して京都に遊んだ。

之が彼の四方の志の第一歩であつた。愈々諸國に漫遊することになつたのは歸郷して冢側三年の後である。郷人の嫉忌がなくても彦九郎は雄飛する人物で、雌伏の人でない。郷黨の容るゝ所とならなかつたことは彼の雄飛の時期を早めたに過ぎぬ。

上州の人は彼を容れなかつたが、天下の俊才英志は此奇偉



の人傑を歓迎した。上州由來義血俠骨があり、之を大にして  
は新田の君臣、高山彦九郎あり、之を小にしては國定忠次の  
如きがある。郷黨に容れられなかつた彼は、實に最も善く上  
州人の美點を有して居たのである。しかし上州人の義血俠骨  
も今日では果して萎靡はしないか、否や。官權と金力とに威  
壓され、否寧ろ或は之を利用、悪用したるなどは決して上州  
の名譽でない。斯うなると、前橋市民は事大主義の商人根性  
以外に何等有する所がないと云つてよろしい。寄語す上州の  
人、御身の國からは曾て新田の君臣を出し、高山彦九郎を出  
し、又市井の俠國定忠次を出したのではないか。赤城榛名伊  
香保を有する山紫水明の地は又義血俠骨の凝つた所でありた

四三

るぞ。冀くは永遠に其義血俠骨を受けついで、前橋の選舉の  
やうな識者の譏笑を買ふ勿れ。

### 六 寛政三奇人

世に林子平・蒲生君平と我が高山彦九郎とを併せ稱して寛  
政の三奇人と云ふ。一體誰が云ひ始めたのか、調べて見たら  
ば、其濫觴も分るであらうが、思ふに割合に早い時から既に  
さう稱へて居たらしい。林子平の傳を見ると、大槻清崇の碑  
文にしても、齋藤順治の傳にしても、松林漸の畫像記にして  
も、佐々木知芳の傳にしても、此三人者の關係せる逸話を傳  
へて居る。試に齋藤順治の林子平傳を見ると斯う書いてある。

四三



同時に高山正之・蒲生秀實皆奇士を以て稱せらる。然れども子平と合はず。初め子平、京師に在りて中山亞相に謁す。亞相盛に正之慷慨時事を論じ、涕言に隨ひて下るの状を稱す。子平曰く彼れ泣癖あるのみ。今時昇平なるに、奚んぞ泣くを以て爲さん。即ち憂ふべきものは唯々邊防なり、然るに彼一泣の外、計の出づる所なし。公も亦、彼を以て善しとなす。知らず一旦外寇の變には座して風浪を萬一に得んやと。秀實も亦嘗て子平を訪ふ、行装甚だ野なり。子平一見して罵りて曰く、何物の措大、鄙野乃ち爾かると。秀實怒り拜せずして曰く、野老の人を慢る、亦此に至るか。と、他語を交へずして去る。子平既に廢せられて若干

年、寛政癸丑の歳を以て歿す。其後、東邊果して鄂虜の變あり。秀實其先見に服し、閣老に書を上りて曰く、子平の墓を祭りて其靈に謝して可なりと。松林漸の林子平畫像記にも、子平と相先後して、同じく偉人を以て稱せらるゝもの、上野に高山仲繩あり、下野に蒲生君平あり。と、ありて此三人の併せ稱せられて居たことが分かる。蒲生君平が林子平と相會したのは、寛政二年彼が二十三歳の時で高山彦九郎の跡を追うて、陸奥の國に赴いた時であるが、彦九郎には逢はずに子平と相逢つたのである。しかも此三奇人の中で林子平が高山・蒲生兩人を罵倒して居るのも妙だし、



君平が子平の没後に於て其卓識に傾倒して居るのも面白い。  
しかも蒲生は下野の人で、彦九郎とは其故國が相隣し、いづれも關東であり、子平も亦東北の人で、三奇人中、一人も西や南の人のないのも一寸不思議な感じがする。但し其うち子平は流石に羅馬に使節を派遣した伊達政宗の本國の人だけであつて、夙に海防に注目したのは、他の兩人と聊か異なる節がある。

そこで此奇人若くは奇士と云ふ稱號は當れるか、どうか。子平の議論は如何にも時人と異つて居る處がある。否異つて居るのではなくて、卓越して居るのである。此の點から云つても奇傑の人には相違ないが、彼は磊落の反面に又極めて謹

嚴の人であつた。高山蒲生が激し易い、悲歌慷慨の情の人であつたのに反して、寧ろ理性の勝つた人であつたらしい。晩年に幽閉された時にも、人ありて云ふには、今日のこととは幕府の議に出たので、本藩の意から出たのではない、されば時には保養旁ら出遊して消閑をしたらばよからうと、子平曰く、日月は天にあり、人は欺くべきも天は欺くべけんやと、之を却けたと云ふことである。して見ると、却々嚴格な人であつたに相違ない。其の妻子なくして、寂然として一生を過したのを見ても、彼は決して情の人とは思へない。但し其奇行も随分あつたらしい。齋藤竹堂の逸事に、  
嘉膳(子平の兄)の妻、疫を患ひて頗る劇し、親戚と雖も或は之



を避く、而して子平看護して肯て避けず。其の没するに及び、嘉膳子平と尸を護りて臥す。夜半に子平の所在を失ふ之を呼べども應へず。尸衾の中に鼻息胸々たるを聞き、掲げて之を見れば則ち子平なり。叱して之を起たしむ。子平曰く、夜深くして、寒甚し、故に暫く衾を借れるのみ。抑も嫂已に死せるに、兄猶妬むところあるかと。因りて一笑す。

馬躍りて休まず。數街を過ぎて一侯邸に入る。邏卒之を擁止す。侯出で、其故を問ふ。子平因りて、其所由を詳説す。侯之を奇とし、袍を脱いで焉を賜ひ、且つ護送して之を還さしむ。侯は乃ち閣老某なり。

の二箇條を載せてある。しかし此後の方の逸事は松林漸の畫像記中にもある。

余聞く、子平の藩邸に在るや、一日甲を撰して馬に乗り邸門を出で、直に馳せて水戸侯の邸に入る。門卒其故を詰る、曰く馬逸するなりと。其姓名を問へば、曰く仙臺の林某と卒之を侯に白す。侯素より其名を聞きて召し入る。蓬髮髯麤然として、眼光人を射る。問うて曰く、汝は海國兵談を



著せるものに非ずや。曰く然り。因りて酒を賜ひて遣し還へす。

と云ふものと、異曲同工の話で、恐くは同一の話柄が別様に傳へられて居るのではあるまいか。兎に角、此等の逸話を讀んで見ても、他と異つた所が見えて一世の奇士たるに背かず、又其識見高邁にして、遠く時流を抜いた所は奇傑たるに背かない。唯高山蒲生が感情的なるに比しては、寧ろ理性の勝つた所が見える。

君平に至りては頗る感傷的人であつた。嘗て佐渡に到りて、順徳帝の陵を拜し、其荒蕪なるを慨し、師なる下野鹿沼の鈴木石橋の宅へ馳せ來つて云ふやう、餘りに御陵の荒れ果

てたるを見て悲に堪へず急いで此ことを先生に告げんとして歸り來たと云ひさま號泣した。其途中川を徒歩し、裸體なるをも忘れ、濡れをぼちて、人の指笑するをも顧みなかつたと云ふことである。又水戸の藤田幽谷(東湖の父)の宅に寓した時、晝間は酒を飲で談笑するも、朝夕は必ず線香を席間に炷いて哭泣するので、幽谷の兒女は之を見て狂人だと云つた。又杉山策の塾にありたるに、兒童が遊戯の際に天子は如何なる處にましますやなどと云へるを聞いて、東國の小兒も朝廷を慕ふかと云つて感動措かず、時に或は刀を抜いて吾が面を照し、嗚呼我れ英雄の相なしと云つて、自ら歎じた。又下總の古河に新に學館が出来て宴會があつたが、酒酣なる時、君平は起



つて厠かはやに赴おもむいた。すると夏の夜よのことではあり、蚊かの多い處ところとして、厠中かはやにも團扇うちあしが置いてある。君平くんぺい厠中かはやにて頻しきりに團扇うちあしを使つかつて、蚊かを拂はらつて居ゐたが、ふと、座中ざちゆうで楠公論なんこうろんが出て、中には湊川みなとがはの戦死せんしを目めして眞まことの忠臣ちゆうしんに非あらずなど云いへる議論ぎろんが聞きえた。君平くんぺい憤然ふんぜんとして起たち上あがり、手てにせる團扇うちあしを其儘そのま、座ざに歸かへり、論難ろんなん甚はなだ力ちからめた。すると座中ざちゆうの一人ひとりが之これは臭くさいぞと云いふ。座ざに侍はべる婢ひめ云いふ、あれ、あの團扇うちあしは便所べんじよの物もので御座ござりますと。見みれば團扇うちあしは不潔ふけつに染そめて、満座まんざの杯盤はいばん衣袴いこは其飛沫そのひまつにて汚これざるものはなく、一座いざは啞然あぜんとして流石りやうせきの楠公論なんこうろんも中止ちゆうししたと云いふことである。又また國事こくじを論ろんじて床しやうじやう上から落おちるを知らなかつたと云いふ逸話いつわもあり、尊王そんおうを説といて鍋なべの

四四

飯めしの焦こげつくを忘わすれたと云いふ傳説でんせつもある。又また蒲かほの花はなかゞみに歌人かじん小澤さざ蘆庵あしあんの家いへに宿とまりし時ときのことが載のせてある。修静しゆせい(君平)はある夜よ、更さら闌たけて子こふたつの頃ころ、歸かへりしかども蘆庵あしあんはいねず、待まちて居ゐり、例れいの如ごとく浴ゆみさせ飯はんをすゝめて云いふやう、我われ足下あしかを宿とませる日ひより、蔬菜そさいの外ほかに物ものもなく、させるもてなしをせざれども、老僕らうはくを休やすらはせんとして、手てづからに風爐ふうろさへ焚たくを思おもひくみ給たまはずや、古陵こりやうを尋たづね巡めぐればとて、今いままで用ようなからんに、道草みちくさくうてか、老人らうじんに物ものを思おもはせ給たまふこと心得こころえがたしと嘆なげきけり。修静しゆせい聞ききて、貌かたちを改あらため、翁おきなの恨うらみ理ことわりなり、我われれ非ひを飾かざるにあらねども、夜更よふけたるは、聊いさか故ゆゑあり、懺悔ざんげの爲ために笑わらひに備そなへん。今こん

四七



日は某の天皇の陵を尋ねたりしに、日の暮るゝまで尋ねも  
あはで、思はずも等持院なる尊氏の墓を見たり。こゝに至  
りて、とし頃のうらみ心頭に起りてたえられず、墓に向ひ  
て罵るやう、梟臣尊氏なほ靈あらば、今云ふ言をたしかに  
聞け、汝は一旦治まりたる建武重祚の世を亂して逆に取り  
逆に守りし毒を、後世に流しゝより、二百十數年、干戈を  
さまらず、國の舊典もこれが爲に燒亡し、王室も亦これに  
よりて卑く、古帝世々の山陵すら迹なくなりて、我等にさ  
へ飽くまで物を思はする者、皆悉く汝が罪なり、天罰當に  
知るべしとて、杖をもて石塔を思ふまゝに打叩き、かくて  
寺門に出るほどに、物ほしうなりしかば、道のほとりの酒

屋に立寄り、怒りにまかせて飲むほどに、六七合も盡した  
り。さて酒屋を出しかど、酔にて足も定まらず、此まゝに  
て歸り往かば、翁に叱られん、半醒してゆかんと思つて、  
株に尻をかけしよりうま寝やしけん、時も移り、驚き覺む  
れば、更たりけりと語るに、蘆庵は噴き出して、思はず呵  
呵と打笑ひ云々。  
此等を見ても、君平が慷慨家の特質なる感情家で、其の感  
情の迸發する所が往々奇行を致したことが分る。まことに一  
代の奇人と云つて差支がない。しかし君平は學者であつた。  
少時より鈴木石橋の門に入つて、學問をしたから、中々素養  
が深かつたのである。其著書にも山陵志、職官志、今書、不恤



緯つゝがある。詩しも作つくれば文ぶんも作つくる。歌うたも狂歌きやうかも川柳せんりやうもやると云いふ、多藝たげいな人ひとであつた。

漁父

細雨扁舟一笠蓑 岸蘆洲荻隔烟波

江山遠近多幽趣 釣罷吳聲發棹歌

白川の關にて

道奥みちのおくはまたも越こえなむ契ちぎりあれば

限かぎりを何いつ時つか白川しろかはの關せき

の如ごときは頗すこぶる情調じやうてうに饒ゆたかである。又また百人ひゃくにん一首しゆの初句しよくを取とりて

夜よもすがら物案ものあんするは此この旅たび寝ね明あけやらで寢屋ねやの火桶ひづくも搔かき探さがし

筑波根つくはねの見みねば戀こひしく爐次ろじで咳せき

立別たちわかれ田舎いなかの三みとせ結句けつぐして

難波なには渦がたみじめな旅たびも遣つかうた後ご

有明ありあけのつれは戻もどるにいくぢなし

忘わすれじの行末ゆくすゑ泣なくも病やまひゆる

忘わすらるゝ身みより忘わするゝ人ひとの罰ばち

忍しのぶれど色いろにお前まへの物もの惜おしみ

忍しのぶれど色いろに出替でかりたゞもだし

八重やへ葎むらしげきは倦うの出でやうはし

心こころにもあらで浮うき立たつ座ざも勤つとめ

の如ごとき、又また風流ふうりゆうの才さいに富とめるを見みるに足たりる。



其學問の點から云ふと、彦九郎は到底君平に及ばない。しかし君平は學問があつただけ、感情家ではあるものゝ、どうしても議論に捉はるゝ所があつた、彦九郎になると、唯之れ精神の人、熾烈なる熱情の人である。

其奇人の點になると、彦九郎は固より子平君平に譲るものではない。其感情の點から行くと、彦九郎は君平よりより以上である。一夕感ずる所があつて、其身を自ら殺すまでに極端となることは彦九郎でなくてはなし得ぬ事である。

柴野栗山の序に

歳の二月、飄然として京に入り、余が古愚軒を顧み、入りにて相揖して謂て曰く、吾れ喜んで天下奇人偉士の面を観る

こと、猶草木の英華を観て我が目を悦ばすが如し、吾が適く所の邦、往々子の名字を道ふ、意ふに或は子の奇なる、目の豎にして、鼻の横ならんか、是を以て來り觀るなりと余起て之を延く。其衣は敝垢綿を見はし、劍鮫室漆已に剝げ粒脱す。酒酣にして座上を睥睨し、天下の形勢人物風俗を説く。聲金石を發し、氣は鬱勃人を蓋ふ。

とある。彦九郎自ら奇にして、猶大に其奇なるものを求めんとしつゝあつたのである。時勢は最早其平板に倦きて居る。奇なるものが出て、大に其單調を破らねばならぬ。其奇なるものは即ち革新の豫言者であり、傳道者であり、鼓吹者であり、又單調の破壊者である。天は即ち林子平を出し、蒲生君



平を出し、更に最も奇なる彦九郎を出して、其使命を全からしめんとしたのである。寛政の三奇人は、要するに時人の眠を覺ます警鐘であつた。

七 江戸日記

龍は寸にして既に上天の氣ありと云ふ。田舎の學者に就て四書五經の素讀などを習ふを甘せざる彦九郎は郷里を去つて、活學問をしやうと云ふ氣が旺然として其青春の血潮を動かしたのである。猶之には他にも色々の事情があつたらう。十八歳の時、家寶の備前兼光作の一刀と菊一文字の小刀とを、潜に腰に佩びて、京都へ出奔したと云ふことであるが、定めし

京都に入つて王室の式微なるを見たらば、慨然たるものがあつたらう。之を彼が旅行の皮切りとする。

彦九郎の一生は東奔西走南船北馬、席暖まるに違あらざるにある。しかし其旅行はつまり武者修行の他流仕合と同様で、天下の志士豪傑と交ると云ふ點にある。けれどもそれだけならば、唯自家の修養自家の砥礪研磨に止るのであるが、彦九郎は猶其他に大なる使命があつた、即ち尊王論の傳道である。尊王論の傳道は彼の生命で、是に於て彼の旅行に光彩あり、意義があるのである。

彦九郎は磊落の性質であつたが、同時に、頗る綿密周到な處があつた。それで、彼は日記をつけて、旅中の事を細大と



異

なく之を記述して居る。今日残存する所の江戸日記、京日記、鎌倉日記、筑紫日記などと云へるは、それである。又世に傳ふる所では日記に表日記と裏日記とがあつて、表日記には日の出来事詩歌などを載せ、裏日記には志士の談話秘密の相談などを記し置いたものである。しかし幕府の檢舉を恐れて、裏日記は後年之を焼き棄てたと云ふことを云つて居る。

此に江戸日記に就て、彼の性格行動等を窺つて見よう。今傳はる所の江戸日記は寛政元年十月三日から始まる。其開卷第一の三日の記事を此に轉載する。

寛政元年冬十月三日 乙卯 快晴

江戸神田鍛冶町二丁目上州屋勘左衛門の所に昨夜宿す。今

朝、伊賀鎮靈神、鎮得靈神に御酒を獻じて拜し奉り、出でて神田橋を入り、八重洲川岸林大學頭殿の内なる中島左仲常足の所を尋ね、市川主計に相識となる。新田郡新井村の産也。根本勇助の所を尋ね、他出なり。澤木萬喜太に相識となる。

歸りて中島常足と語る、朝鮮王よりの書の寫を見る。蝦夷人も静まりける由にて、南部慶次郎殿より林家に寄せたりし書を見る。爰に載す。

昨夕御用番牧野備後守殿より留守居の者御呼出し、先達て蝦夷人及騷擾候旨相聞え候に付、松前志摩頭殿より申越次第人数差出し候様被仰渡候處、蝦夷人は志摩守殿に

四七



て被取鎮候に付不及其儀旨以御書付被仰渡候、此段爲報  
知如斯御座候以上

九月十二日

林 大 學 頭 様

南 部 慶 次 郎

とぞ。常足に廢城考を借り、頼千秋が求めを許さん事を欲  
すと云へば、内々にて借し進らすべしと諾す。六日以後に  
持參致すべしと約せり。常足、井上仲、名は潜、字は仲龍、  
號は四明が所へ案内す。仲龍在宿にて語る。岡山侯の家臣  
水野三郎兵衛義風は山陽道第一の奇人なりとぞ。語りて熊  
澤蕃山の事に及ぶ、仲龍語るに、熊澤は外祖の姓にて、實  
は野尻氏なり。外祖父熊澤半右衛門なるもの、蕃山の兄共

に養子として水府に事へ、町奉行を勤めたり。故に水府史  
纂には蕃山水戸に於て産すとあれど、京都稻荷山に生れた  
りと、池田丹波守殿に傳はれる神主の裏に記るせり。蕃山  
播州明石の城主松平日向守殿に預けられたりける所、日向  
守殿大和の郡山に封を移され、其の後又下總の國古河に移  
さる。因て熊澤も又古河に終る。熊澤の嫡子右七郎、次子  
を左七郎と號す。右七郎は後に岡山に事へけれども、侯の  
二代目に及びて諫争したりけるにより退けられて、本の采  
地なれば蕃山に籠居す。子孫は岡山にあらず、松平日向守  
殿にあるべきよし。日向守殿今は山城守殿と申して、羽州  
上の山の城主なりとぞ潜が語りし。土肥典膳の書を貸すべ



しとて、座右を尋ねけれども見えず。近きに旅宿へ届け進  
 らすべしとて止みぬ。斯くて予は出で、霞ヶ關藝藩の邸に  
 入り、頼千秋に佐藤子錦が中風に成りぬる事を告げ侍る。  
 蝦夷人百五十人死刑に行はるゝのよし風聞あり。古は日本  
 人一人を殺せば、夷人三五人を解死人に取らるゝの定めな  
 りつれども、人種も盡るに及べりとして減少なりしとぞ。如  
 何知るべからず。

仙臺國政宜しからず、有得の者あれば、悉く金子を取り  
 上げて、是を有金上納と號す。金壹分に付十二三貫、金壹  
 兩に付五十貫餘ありしとぞ。飯酒出でて語れり。遂に旅館  
 に至る。

本庄宿三郎右衛門に武家法度を寫さしめ、秩父郡贄川宿佐  
 平に餞贖とす。入湯して拜し奉る。旅館越前屋が二階に張  
 り付けたる書を爰に載す。

口 上

一 博奕諸勝負致候もの召捕差出候様に先達て御觸有之候  
 處、此度麻布善福寺門前に右體のもの有之、今般當人並宿  
 遠島、家主五人組町役人迄銘々過料錢被仰付已來少々たり  
 とも諸勝負事御無用に御座候。

西十月

家 主

とぞありける。

赤坂田町壹丁目を出で愛宕五郎兵衛小路服部善藏の所へ寄



りて、子錦中風の事を告ぐ。築地備前橋に及んで日を仰ぎ奉る。権田半七と共に奥平侯の中邸に入り築次正に告げ、前野喜仙翁の所に至りて食す。時に暮れたり。手水し拜し奉る。喜仙の女、今井正庵の隣家九歳の童子、奇才なる事を擧ぐ。予聰明叡智なりと歎賞す。其の後築氏に行きて語る。主人及び前野達、権田半七、渡邊茂雅と座談刻を移して前野氏に歸て宿す。  
瀬奈源五郎は諸家の系圖、江戸市中の事に通じたるによりて、奥御祐筆、組頭同格にて御上進の間御次に於て老中壹人若老中一人にて申渡さる。柴野彦助には躑躅の間に於て申渡さる。先月十日岡田清助には奥御祐筆部屋に於て老中

列座若老中侍座にて、牧野備後守様申渡さるとぞ。頼千秋が語りし。塙檢校が宅は土手四番町東城源右衛門殿長屋なるよし常足語る。  
前野氏に宿したりける夢に、岩壁の危き所など既に落つにもなん／＼とするに落ちず、心に危しとも覺えず、難所を経る事多し。長叔も政徳も途を共にするとは覺えつれども、予程に危しとも見えずぞありける。予が心には危も都て樂めるが如く覺えぬ。笑ひつ過ぐる事にぞありぬ。同じ頃に祖母公も見え玉ひける。御機嫌よろしとぞ覺ゆ。さめて後に座して拜す。程無く六の鐘を聞きぬ。  
之が寛政元年十月三日、一日だけの日記である。随分詳細



を極めて居るではないか。自分の行動は固より、他人の談話、南部氏の書翰、宿屋の張り紙から、其夜の夢まで記述して居る。之が心身共に多忙なる彦九郎の日々の閑餘の仕事であるから驚く。

伊賀鎮靈神とは祖父の神位で、鎮得靈神とは祖母の神位である。神酒を奉り、其靈を拜することは、日記中、到る處に見えて、其の懇篤の情は人を動かすに足りる。頼千秋は春水のことで、即ち山陽先生の父である。春水とは其交りも餘程深かつたことと見える。山陽先生の彦九郎傳も恐らくは乃父から傳聞したのであらう。春水に會て彦九郎に贈るの詩が數首ある。

贈高山仲繩

曾識帶經耕且鋤 新田逃跡惜三餘 秋霜春雨時攀樹 月下花陰或侍輿 幾處雲巖尋傑士 連年華洛拜皇居 相逢杯酒宜論志 大丈夫何必讀書

似高山仲繩

自從相見十餘年 心事論來未豁然 爲囑歸田力耕讀 英雄心事在陳編

送高山仲繩君

萍蹤離合意何疎 把臂論心感有餘 君道新田歸隱去 春烟

深處帶經鋤

春水既に彦九郎と交り篤かつたから、春水の弟杏坪も亦従つ



て彦九郎と相識であつた。杏坪の贈詩に、

贈高山仲繩

一生慷慨嘆興亡 扼腕常過古戰場 誰識風流滿眼世 汝家

赤壁畫周郎

大阪に居て、懷徳書院を経営して、一代の儒宗を以て知られ、父登庵弟履軒とともに天下に名高かつた中井竹山(積善)は春水の送別詩に次韻して彦九郎の歸郷を送つて居る。

依頼千秋韻 口占以送高山君歸郷

卒然相見不相疎 驚爾萍蹤萬里餘 欲問飄々歸去意 由來

賢達在畊鋤

日記中にある夢は彦九郎の一生を語るやうで、面白く思は

れる。危い處にあつて、之を快と思ふが如きは彦九郎自らを語るものではあるまいか。祖母の夢を見たことは此夜に限らず、處々に之を記述して居る所を見ると、其の思ふの心の切なる、夢寐に之を忘れ得ぬことが分る。

日記は偽らざる告白である、赤裸々の高山彦九郎を見得べきものである。日記は彼の性行を語り動作を語り、交友を語り、起居を語つて居る。之に依りて見ると、彼は江戸に於ける、大儒碩學と交際して、氣義を以て許與されて居たものである。上州の田舎漢を以て遇せられずに、天下の奇士、卓犖不羈の英才を以て待遇されて居たのである。幕府の官學なる昌平黌の教官として、寛政三學者の一人なる柴野栗山とも交



際さいのあつたことが分わかる。栗山りつざんの送序そうじょにも、歳としの二月にがつ飄然ひょうぜんとして京きやうに入り、余よを古愚軒こぐ軒に顧かへりるとありて、其その始めて相逢あひあつた状況じやうきやうを詳つまびらかにして居ゐる。

其そのの見る所ところの人は、忠臣ちゆうしん孝子かうし仁人じん、義勇ぎゆうの士しより名卿めいきやう、大夫たいふ、賢守けんしゆ牧ぼく、才子さいし、文人ぶんじん、博物ぼくぶつ智謀ちぼ及び夫かの儒道じゆだう醫卜いぼく占工せんこう、衆伎しゆうぎの流りゆうより、其術そのじゆつを以もつて世よに名なあるもの、下くだりては博奕はくえき、屠販とはん、游侠いゆうげ、角力かくりき、細さいにしては婦人ふじん、孺子じゆし、僕隸ぼくれい、苟いやしくも人ひとに殊まさりて世よに崎さかなるものは遠とほしと雖いへども必ず索もとめ、一ひとたび其面そのおもてを見みずんば已やまず、或あるひは其それと歡くわんすること累日るじつ、涕淚たんだを垂たれて別わかると云いふ。

とあるが如ごとく、彦九郎ひやくちゆうは他流仕合たくりうしあひの如ごとく廻國くわいこくして人物じんぶつ歴訪れきぼうを

やつたものである。従したがつて日記にっき中には名人めいじん大家たいかとの交際かうさい、其その談話だんわ振ぶりが仔細しさいに出でて居ゐる。

此こゝに江戸えど日記にっきを擧あげたのは、つまり彼かれの日記にっきの標本へうほんとして示しめしたに過すぎぬ。此等これらの諸日しよにち記きに依よりて彼かれを叙述じゆじゆつしたならば、彦九郎ひやくちゆうの面目めんめくは躍如やくじよとして活現くわつげんし得うべきである。

### 八 彦九郎と水戸學

水戸學みとがくは義公ぎこうより起おこる、義公ぎこうの大日本史だいにほんし編纂へんさんの嚆きよより起おこる。

神皇正統記じんかうしやうとうきに、

異朝いてうの一書いっしょの中なかに日本にほんは吳ごの太伯たいはくの後のちよりといへり、かへすくあたられぬことなり。昔むかし日本にほんは三韓さんかんと同種どうしゆなりとい



ふことのありしが、このことを桓武の御代に焼すてられしなり。

とあるが、之は支那の晋書に「倭人自ら太伯の後と謂ふ」とあるを駁撃したものと思はれる。興國二年僧圓月なるものが日本歴史を修めて、本朝は吳の太伯の後なり、故に姬氏國の稱ありと書いたのを、朝廷其不稽を責めて、草藁を焚いたと云ふことがある。随分下らない説が流行したものだ、之は古史に太伯が被髮文身して荆蠻に通れたとあるから、臆測したもので、荒唐無稽殆ど取るに足らぬ。しかし今日でこそ荒唐無稽とけなしつけるが、支那の文明に眩惑した時代では之が眞實でないとは承知して居ても、さう云ふ方が光榮である

かのやうに信じた輩が居る。西洋心酔時代にも、随分此位なおつちよこちよいの居たものである。今でも探したらば居るかも知れぬ。徳川時代の漢學者のうちでは自ら東夷の人と稱したのものもあるし、支那流に姓名を改めて得意がつたものも随分澤山あつた。そこで今日では大學總長とも云ふべき家柄の林家の嫡宗林鷺峯なども太伯子孫説を信用して居たのである。それは彼が朝鮮歴史なる東國通鑑に序して、「就て想ふに太伯の至徳にして我が王跡を基し、箕子の仁あつて以て彼の土地を開くは均しく先聖の稱する所なり」と云つて居るのでも分明である。それで林家の撰修した本朝通鑑にも此傳説を載せて居たのを、水戸の義公が御覽になりて、命じて梓行を



やめさせたといふことである。今の本朝通鑑に此傳説がないから此話は嘘であらうと云ふものもあるが、前の東國通鑑の序から見ると、鷲峯が此意見を持つて居たことは明であるから、恐くは以前の本朝通鑑には此傳説を載せて居たかも知れず、義公が注意で其後之を削除したのかも知れぬ。斯う云ふ時勢であるから、義公が兼々の思召なる歴史編纂を愈々斷行しようとなされたのは當然である。

此大日本史は云ふまでもなく大義名分を明にすると云ふ大趣旨から編纂されたのである。大日本史編纂と、もに京都の學者が多く關東に集り、種々歴史論を討議して、大義名分を正したのが、即ち水戸學の濫觴である。

そこで水戸には學者が多く、其學者は皆一見識を有し、時事に就いても一隻眼を有したものがあつた。高山彦九郎が江戸及水戸に遊ぶや、多く此等の水戸學者と交つた。彦九郎は之に依りて、史的知識を得たでもあらうが、彦九郎の倜儻不羈にして悲歌慷慨なるは、精神的に又此等の水戸學者に影響する所もあつたらう。杉山忠助の彦九郎傳に、

寛政己酉(元年)の秋正之、江戸に遊びて長久保玄珠を訪ふ。

玄珠は水戸の人なり、嘗て立原萬に書を遣して曰く、某京都に在りて高山處士と交る。此人倜儻奇偉、一錢を齎らさずして天下を跋涉す、常に自ら魯仲連の人となりを慕ふと。適々藤田一正年十三、詩を作りて之を贈り、亦目するに魯



連を以てす。是に至りて一正萬に隨ひて江戸に在り正之見  
て甚だ驩び、一正に謂つて曰く我れ天下を遊歴して人を閱  
すること多きも、未だ卓越なること足下の如きものを見ず、  
足下自愛せよと。因りて言ふ足下多病なり、講學の餘、宜  
しく武藝を試むべし、劍は一人の敵と雖も、陣に臨みて衆  
に先たんとせば、身に精藝なかるべからず。且つ身體を健  
にするを以て、亦勤學に益あるなりと。(中略) 庚戌の夏、遂  
に意を決して北遊せんとし、玄珠に詣りて別を告ぐ。玄珠  
之を壯とし、酒を置いて之を餞す。玄珠家に鎮宅靈神の鐸  
を藏す。建武中楠河内の獻じ奉るところのものなり。文に  
玄武神とあり。正之をして之を拜さしむ。正之大に喜で曰

く、我將に北行せんとし、祖道に當りて此神を拜す。吉執  
れか焉より大ならんと。盥嗽し、禮服を著けて感泣するに  
至る。又玄珠に謂つて曰く我遊歴を以て事となす、今日の  
行は萬死固より甘ずる所なり、身後のことは復念慮に關は  
るものなし。但一事の君に託すべきものあり。某息女あり、  
天下の名士を得て之を與へんと欲す。藤田子定は國士無雙  
なり。若し君に因りて之が箕帚の妾たるを得ば、死すとも  
當に草を結ぶべきのみと。子定は一正の字なり。竟に去り  
て水戸に至り、立原萬藤田一正及び他の有名の士を訪ひ、  
留ること數日。一日萬人に謂て曰く、活雲長來る、子往い  
て之を見よと。正之鬚髯に美なり、故に萬戯れに此を以て



す。又木村謙あり、天下野村に居る。正之一見舊交の如く、  
肝膽相許す。

四六

文中に長久保玄珠とあるは、赤水のことで、水戸學者中最も  
地理學を以て聞えて居る。著す所、日本地理志、日本地理考、  
日本輿地路程全圖、唐山古今沿革圖、萬國地球圖說、清廣輿  
地全圖、朝鮮全圖、琉球全圖、蝦夷松前全圖等がある。立原  
萬は、翠軒と號し、水戸の史館なる彰考館の總裁であつて、  
鬱然として水戸儒の宗であつた、又水戸の政事にも參與して  
献替するところが少くなかつた。藤田一正は即ち幽谷で、東  
湖の父である。幼にして神童の目があつて、十三の時、赤水  
の爲に壽序を作つて、時人之を奇としたと云ふことであり、

其作つた或文章を清人程赤城が感服したと云ふことであるか  
ら、彦九郎に識拔せられたのも尤もである。其十三歳のとき  
に作つた彦九郎の祖母の壽詩を見ても、詩文の才に長じたこ  
とは驚くべきものがある。水戸の史館に入つて編修となつて、  
正論讜議自ら持して人に譲らなかつた。殊に東湖其人は乃父  
の遺傳と教訓とを受けてあれほどの豪傑になつたのであるか  
ら、幽谷の卓邁なることは又思ふべきである。父の喪に當り  
て、心喪に服すること三年であつたと云ふを見ても、畧々其  
の人となりを想ふべきである。之は後年のことであるが、常  
陸の海岸大津村に英吉利の軍艦が來れりと聞いて、幽谷は其  
子東湖を呼びよせ、近頃夷狄どもが、我が邊境を窺ひ、甚だ



傲慢無禮である、然るに世間ではなるべく事勿れかしと冀ひ  
て、其の意氣地なきこと真に唾棄すべしである、此度の事件  
も例の姑息な幕府のことであれば、其儘放還に決するであら  
う、果して然らば之れ神州正氣の頹敗である、汝夙く大津に  
赴き、其様子を伺ひ、幕議が放還するにあらば、直に夷狄を  
斬り殺し、汝は従容として官に訴へ、其處決を乞へよ、一時  
の計策ではあるが、又以て神州の正氣を伸ぶるに足らう、某  
には唯々汝一男あるばかりである、汝死さば我が家系は絶え  
る、されば是れ吾と汝との命が盡きる時であるぞと。辭氣惻  
惻として、慷慨淋漓。東湖時に歳十九であつたが、父の言を  
聽くや、畏り候と答をした。幽谷喜で曰く真に吾が兒である

と。直に出發の用意をさせた。折しも一族の丹就道なるもの  
が來訪したれば、幽谷は酒を命じ、心私に吾兒の爲に送別の  
宴を張つた。丁度其酒宴最中に、大津の英艦は幕府から薪水  
を給與して去らしめたとの飛報が到來して、遂に此事は已ん  
だが、此父にして此子がある。後年東湖が水戸の中心となり、  
天下志士の崇拜するところとなつたのも偶然でない。幽谷は  
夙に國事を憂ひ、或は君臣の大義を論じ、或は邊海の防備を  
議して、水戸學の爲には重きをなして、其の學は常に正學を  
専らとして居たが、詩文の才も水戸學者中優に一頭地を抜い  
て居る。立原翠軒とは編史の上に於て意見を異にし、翠軒は  
江戸の史館派を代表し、幽谷は水戸の史館派を代表し、此兩



者意見の衝突は、やがて後年水戸の政争を惹起したのである。  
彦九郎は幽谷に痛く敬服した。其年齢の上から云ふと、兩者の間には格段の徑庭があつたが、幽谷は彦九郎と忘年の交をしたのである。幽谷は彦九郎が推稱したのみでなく、蒲生君平も、亦痛く之を賞揚して、我れ天下を周游するも、未だ英才卓識、幽谷の如きものを見ずと云つたとある。幽谷英雄の才實に欽すべきものがある。されば彦九郎の死せりと聞くや、幽谷は慟哭して之を祭り、文を爲つて之を弔した。其中の一節に云ふ、

昔し予師に従ひて江都に官學し、始めて子を傾蓋して晤言するを得たり。久しく倜儻の高節を想像し、忽ち奇偉の盛

幽谷

論に激昂す。吾何を以てか大兒忘年の交を辱うするも、獨り稱衡の偃蹇を愧づ。疾なれば即ち藥を餽り、歸れば即ち行を送る。子の東する又余が門を顧み、堂に上りて親を拜する已に數歳、音容目に在り、諶るべからず。嗚呼子高尙の質を懷きて、魯仲連の人となりを慕ふあり、難を排し、紛を解き、戰國の策士に非ずと雖も、世を輕じ志を肆にし、太平の逸民たらんことを庶ふ。能く王を尊みて霸を賤むを知る、豈啻に當年の秦を帝とせざるのみならんや。秦中の装は一錢なくして劔を彈じ以て津を問ひ、書は纒に以て名姓を記するに足りて、劔は身を防ぐに餘あり。身は國に爵位あるに非ず、仕へずして乃ち心は朝廷。赤狄の北陲を



蠶食し神州を覬覦するを聞いて、其の後世天下蒼生を害せんことを恐る。上下宴安して方に鳩毒に耽るに、子は獨り慷慨し、命を受けず、私を以て行き、陽に浪客となりて、山水に漂遊し、陰に國家の爲めに虜情を探偵し、期するに衣冠禮樂の文物をして被髮左衽、羶腥に變せざらしめんと欲す。

と。一代の英才が其の最も己を知れる稀世の快男兒を悼むのであるから、文情並び到りて、神哭鬼泣せんとするものがある。此祭文は實に余が中學時代に於て最も愛讀したものの一で、幽谷先生は又余が最も敬慕する一人である。余は幽谷先生を敬慕するの情よりして、先生が自筆の尺牘數通を卷子と

なし、常に座右に置いて、今に親炙し師事して居る。

幽谷は水戸學の精神を最も善く發揮して居る。之れ幽谷が識見學問の致す所ではあるが、是までは水戸學は一の机上の議論であつて、未だ眞に公に痛切に之を時事に運用するに至らなかつた。之をして公然と時事に觸れしめたのは確に彦九郎の力であつて、幽谷などは此點に於て大に彦九郎の感化を受けたことと思ふ。獨り藤田幽谷のみならず、水戸の學者は熱烈なる彦九郎の至情に動かされて、此に水戸學は歴史上の大義名分論を離れて、直に堂々と時事問題の大義名分論に移つたことと思はれる。

彦九郎は豫言者である、傳道者である。しかし彼の言ふ所



と行ふ所とは一致する。竹内式部や山縣大貳の尊王論はまだほんの議論に過ぎなかつたが、彦九郎に至りては自ら熱烈に之を實行して他人を感化せずんば已まなかつた。

水戸學は遂に維新大業の基を作つた。水戸は後年尊王攘夷黨の中心地となつた。流石に御三家の一であるから、宗家なる徳川幕府に向つて弓を彎くことはしなかつたが、天下の志士は水戸に赴いて其洗禮を受け、尊王攘夷論を呼號して、之を實行の上に現し、倒幕の擧を敢てしたのである。

水戸學は義公に依りて起り、歴史の大義名分論よりして、遂に尊王の精神を鼓吹するに至つたが、彦九郎の熱烈なる傳道躬行に依りて更に其精神を鼓舞せられ、机上の議論より一

轉して、正々堂々と、適切に剴切に時事の討議をなすに至つたのである。

### 九 楠 公 論

蒲生君平が古河の學館で楠公戦死尙早論を聞いて廁中から飛び出し、正論譎々として一座を壓倒せんとした奇談は前にも述べて置いたが、楠公論は當時の志士論客に依り、屢々繰り返され痛論せられたものである。楠公は維新志士に取りては憧憬の中心、渴仰の對象である。日本の尊王論を説かんとするには、是非とも楠公論なかるべからず。

彦九郎にも亦楠公論がある。杉山忠亮の傳に、



其の書史を覽る、初めは意を經ず、目を過ぐれば則ち是非を剖ち、義理を析き、精思するもの、若し。嘗て室直清の論著するところ、其の楠公を論ずるに至り、召に應じ、直に笠置に造るを以て度量足らずとなし、諸葛亮の三顧乃ち廬を出づるの事を引いて以て之を議するを見、憤然として罵りて曰く腐儒、何ぞ事を論ずるの迂なるや。夫れ元弘の時、豈三國と年を同うして論ずべけんや。劉漢の末、天下分裂し、豪傑並び起る、此の時に當りて、劉玄德はもと履を販り、蓆を織るの人、自ら稱して帝室の胄と曰へども、豈能く其眞妄を辨せんや。亦猶ほ今世奴僕の輩が號して源平と稱し以て自ら誇るもの、如きなり。孔明の三顧にして出

づるは、我が心に於て猶以て速かなりとす。百願二百願を累ぬと雖も、猶未だ緩なりとなさず。楠公の如きは則ち是に異なる。赫々たる天朝は神器の在るところ、六合の仰ぐところなり。開闢以來、神聖相承け、皇統一姓、之を無窮に傳ふ。普天率土、孰れか皇民にあらざらん。而して楠公は則ち廷臣の裔にして、畿内の民なり。召命なしと雖も、豈國家の難を視て、恬然として自ら安すべけんや。天皇の蒙塵を聞いて奮然杖を投じて起つ。何んぞ彼の諸葛輩の爲すに倣ふを得んや。書を讀んで是の如くならば、百萬卷と雖も何の益あらんやと。其書を取りて之を堂下に投ず。如何にも、室鳩巢の議論は甚だ僻見と云はねばならぬ。楠公



と諸葛亮とは時々對照されるが、之は甚だ當らない。一體支那で忠と云ふ觀念の開けたのは餘程後の事である。家族制度本位の支那であるから孝を以て百行の本となし、孝を獎勵することは至れり盡せりである。舜は親孝行の爲に天子に擧げられたと云はれる。父子親あり、親は孝を以て第一とする。長幼序あり、序は禮を以て第一とする。君臣義ありであるが、忠を以て之を繋ぐと云ふことは言つてない。忠と云ふ語はあるが、忠は忠信の忠で、忠義の忠でない。伯夷叔齊が周の武王の紂を伐つを諫めたときにも、臣を以て君を弑す、仁と謂ふべけんやと云つて居て、忠とは云はぬ。仁は即ち人道で、博く愛する義で、忠義の意味ではない。殷の紂王が武王に亡

ばされたるも、一人の起つて紂王の爲に義兵を擧げたものがない。忠義の觀念は甚だ薄いと云はねばならぬ。支那の戰國時代には、容れられずんば即ち去ることを主義として居た。齊に容れられずんば楚に入り、楚に用ひられずんば秦に行くと云ふやうな風であつた。是時に當りて忠義の觀念を求めても到底得べきものではない。孟子の如きは明に一夫の紂を誅するを聞く、未だ君を弑するを聞かずと稱して、君君たらすんば臣は臣たらずでもよいと許して居たのである。論語を讀でも君臣の義に就いて孔子の教へて居る所は甚だ少い。國、道なくんば仕へずと云ふが如き一身の廉潔を鼓吹して居るが、臣下が何時如何なるときにも忠義の行動をせねば



ならぬと云ふやうなことは一言も稱道して居らぬ。  
 それで、君の爲に仇討をするが如きことも餘り流行らない。  
 父の讎の不俱戴天なることは曲禮にも云つてあるが、君の讎  
 のことはない。復讐もないではないか、其觀念は我邦と違ふ。  
 晋の豫讓は君の爲に復讐した標本と云はれて居るが、其豫讓  
 が言ふには、士は己を知る者の爲に死し、女は己を悦ぶもの  
 の爲に容くる、范中行氏は衆人をもて臣を遇す、臣故に衆人  
 もて之に報ふ、智伯は國士を以て臣を遇す、臣故に國士もて  
 之に報ふと唱へて、知己の恩に感じて復讐を企てたのである、  
 人の祿を食む者は人の事に死すとは、大分相違した點がある。  
 そんなら支那で忠義の觀念が發達したのは何時頃からかと

云ふと、先づは東漢以後のことであらう。尤も西漢の初に、  
 紀信が漢高祖の身代りをしたと云ふこともあるが、まだ忠義  
 の觀念が發達したと云ふ證據にはならぬ。東漢の光武皇帝が  
 學問を盛にし、名節を獎勵し、之につぐに、明帝章帝などが  
 其遺志を紹繼して、盛に節義を鼓舞した。其結果は著しく東  
 漢末に現はれたのである。魏の曹操が天下を三分して其二を  
 保つたるにも似ず、我は周の文王たらんと稱して、遂に帝位  
 を篡奪しなかつたのも、要するに此結果に外ならぬ。三國時  
 代の人才は戰國時代の人才と違つて、決して主人を取替へて  
 轉々するやうな事はなかつた。諸葛亮の如きは知己に感じて  
 起つたのであるが、既に起つた以上は飽くまでも蜀漢の爲に



盡して、天晴れの忠臣よと云はるゝまで立ち働いたのである。既に知己に感じて起つたのである。草廬三顧は知遇である。もとより劉玄徳との間に前からの君臣の義はない。我が楠公が直に笠置の間に應じたとは固より其事情を異にして居る。承久の亂で皇室が鎌倉幕府の爲に大悲運に御遭遇なされたから、いつか恢復しやうと云ふ御念慮は已まなかつたのである。殊に持明院統と大覺寺統との迭立問題があつて、持明院統は鎌倉幕府を頼みとなされ、大覺寺統は鎌倉幕府に疎外されたと云ふことから、鬱積せる不平は大覺寺統の後醍醐天皇に依りて爆發したのである。しかし御醍醐天皇も決して、單なる御思付ではないから、もと／＼から御準備をなされたの

である。楠木氏は河内に於ける豪族で、其一族も随分繁衍して居た。どの位の所領を有して居た豪族であるかは、善く分らぬが、凡そ七千貫ぐらゐは、あつたらうと思はれる。楠公は河内國南河内郡赤坂村大字水分の出生と傳へらるれば、此邊が即ち楠木氏の居館のあつた所で、根據地である。和田橋本神宮寺などを初めとして一族は彼方此方にある。又楠木氏と縁を結び居た豪族も少からずあつたらう。楠公夫人はどこから嫁したか分明でなかつたが、近頃は河内の豪族南江氏の女であるといふ説がある。又南江氏の居館に近く松尾氏もあつて、これも楠木氏とは所縁があつたらしい。とにかく楠木氏は河



内に於る一大豪族であるから、討幕の軍を起し給はんと下の心があらせられたる後醍醐天皇が之に御注目あらせられたのは當然である。増鏡には、

初より頼み思ぼされたりしに、楠木兵衛正成と云ふ者あり心健く直よかある者にて、河内國に己が館のあたりを、嚴しくしたゝめて、

とあつて、後醍醐天皇は初より之を頼み思ぼされたとのことである。又同じ増鏡に、

過ぎし頃、資朝(日野)も山伏のまねして、柿の衣にあやむ笠と云ふもの著て、東の方へ忍びて下りしは、少し怪しかりし事なり、早う斯る事どもにつけて、彼方様にも宣旨を受

くる者もありけんめり、俊基(日野)、紀伊國へ湯浴に下るなど云ひなして、田舎歩きしけるも、今ぞ皆人の思ひ合せける。

とあり、太平記にも俊基が姿を山伏にかへて大和河内に赴いたことが書いてある。資朝か俊基か、楠公を訪うて密旨を授けたと云ふことは、歴史にも見えぬが、略々想像するに難くはない。

しかし前以て勅旨があつたにせよ、なかつたにせよ、楠公は固より討幕の義兵を擧ぐるに躊躇はしない。三顧されて出るなどと云ふのは、君臣の關係が違ふ。然るに江戸時代には支那崇拜の漢學家が多く、従つて支那の事物とさへ云へば、



非常に結構なものと心得て、其の立脚點から論ずるものが少  
からずあつた。自ら東夷の人と稱した物徂徠の門下であるか  
ら室鳩巢なども、楠公諸葛亮比較論などを擔ぎ出したもので  
ある。尊王論に於て先覺者なる高山彦九郎が之を一喝し去つ  
たのは固より當然である。

彦九郎の楠公論は出處非早論であるが、君平の楠公論は戦  
死非早論である。楠公は何も自ら好で戦死をしたのではない。  
策するところの略が用ゐられず廟議動かすに由なく、即ち甘  
じて大敵に當つたのである。けれども其の到底勝つこと能は  
ずして戦死すべきなるを豫知したから遺訓を愛兒に授けて(太  
平記に従ふ)、湊川に出陣したのである。楠公の湊川戦役は殆ど

其力のあらん限り、最善を盡し、矢盡き、刀折れて、即ち一  
族郎黨俱に君主の爲に殉したのである。敵方の記録なる梅松  
論にさへ、

最彼の振舞符合しければ、誠に賢才武略の勇士とは、かや  
うの者をや申すべきとて、敵も味方も惜まぬ人ぞなかりけ  
り。

とある。七生滅賊の意氣は凛乎として、千古に輝いて居る。  
正成死すと雖も、其氣魄其精神はいつまでも我が國民が繼承  
し、邦家亂れたるときはいつにても其之を實現するものがあ  
るのである。即ち楠公未死の英魂は長へに我が國民の間に存  
在する。高山彦九郎の如きは最も善く之を繼承した一人であ



つた。

江戸時代に至りて、攝州尼ヶ崎の藩主青山幸利が楠公の墳墓を寒烟荒草の裡に探り、私に輪塔を建て松梅二株の樹を植ゑて其記念とした。其後元祿五年に至り、水戸の光圀卿は其臣佐々宗淳を湊川に遣し此に碑を建て、自ら嗚呼忠臣楠公之墓と書し、之を碑面に彫り、碑陰には明の遺臣朱舜水が曾て公の畫像に題したる賛を刻んだ。之より楠公が國民精神に及ぼせる反響は非常に大なるものであつた。楠公權助論などを吐く唯物論者の夢想せざる大なるものとなつた。

水戸の大日本史には精細に楠公の傳記を修め、之を賛して、此れ其忠義の心、天地を窮め、萬古に互りて滅ぶべからず、身死すと雖も、しかも死せざるもの固より自若たるなり。と、賞讃して居る。山陽頼氏は樂府に詩に楠公の忠烈を歌ひ、其の日本外史に於ては、

其勤王の功、余、楠氏を以て第一となす。楠氏なかりせば、則ち西狩の駕、吾れ其の承久と一轍に歸して止むを見るのみ。

と讚して、楠公の爲に其精彩ありて生氣潑刺たる文章を以て極力其一生及遺烈を描寫して居る。支那崇拜の漢學者が、徹底しない議論を楠公の上に試むる間に、國民精神は充溢して楠公を復活させようとして居たのである。高山彦九郎の如きも正に其潮流に棹した志士で、楠公の偉大なる感化を直覺し



た第一人である。彦九郎君平などが楠公に就て深い憧憬をし  
て、俗儒以外に一見地を有したのほまことに偶然でない。

一〇 逸 事

高山彦九郎の逸事として、俚謡にさへも歌はれて治く人口  
に膾炙するものは、三條橋上に跪いて皇居を拜したと云ふこ  
とである。此事は割合に詳かで、割合に正確なる杉山忠亮の  
傳には見えぬ。却つて、記事の粗鹵なる頼山陽の彦九郎傳、  
簡單なる齋藤拙堂及鹽谷宕陰の同傳に見えてゐる。山陽の傳  
には、

少うして平安に入り、三條橋東に至り、皇居は何方なりや

と問ふ。人指してこれを示す。即ち地に座し、拜跪して曰  
く、草莽の臣正之と、行路聚り觀て怪み笑ふも顧みざるな  
し。

とある。これによると、少い時、京都に入つて、始めて此事  
を行つたやうである。然るに、拙堂の傳には、

其の京師に来るごとに、先づ三條橋に於て、魏闕を望み拜  
し、自ら草莽の臣高山某と呼び、哭泣數聲にして入る。人  
聚り見て、嗤り笑ふも、顧みざるなり。故を以て、京人、  
必ず某の來るを知り、婦女兒童も、高山某其人あるを知  
らざる無きなり。

と云つてゐる。して見ると、高山彦九郎が、三條橋上の拜跪



は京都に入る毎にした事になる。宕陰の傳も略々之に類似する。高山彦九郎とし云へば、三條橋上の拜跪を以て、其の代表とされ、後世、繪を畫く者は必ず此圖を畫く。偉丈夫が、橋上に跪く圖を見れば、兒女子と雖も、其の高山彦九郎なることを知る。あたかも櫻に題する蓑笠の武人を畫けば、兒島高德なるが如く、股の下を潜る大男の繪は直ちに其の韓信なることを思ふが如く、彦九郎の三條橋上は有名である。此有名な逸話に對して、其の傳に於いて一致せぬ。少い時に、たつた一回限りに行つた事か、京都に入る度毎に行つた事か、此の二傳だけでは明らかで無い。然し、有名となつた點から云ふと、一回だけでは、後世に響き渡るだけの價值が無いの

である。よしや京都の人が、婦女兒童もこれによりて高山彦九郎其の人たることを知つたと云ふことは、誇大であつたにしろ、これは、度々行つた事で、それで有名になつたと思はれる。此點は、寧ろ、拙堂傳に信を置いた方がよからう。高山其の人の如き奇矯な人には、當然ありがちの事である。蒲生君平が、高山の人と爲りを慕ひ、其の北に遊べるを聞き、追ひかけて、陸奥の石卷に至りたるも及ばなかつた。丁度、後醍醐天皇を供養し奉れる塔婆の下に行つたところが、一人の樵夫に遭つた。君平は樵夫に問ふに、汝は偉人を見ざりしかと云へば、樵夫答へて云ふ、某前日一人の武士に雇はれて水を荷ひ、此處まで參つたところが、其の人、水を浴び、禮



服を着て、塔婆の下に至り、跪きて敬禮し、懷中より文を取り出して、これを読み上げ、一字一句歎歎して、如何にも悲しさうであつた、此事は、今より十日前の程の事で、貴方の尋ね給ふは此の人にあらざるかと。此事を事實として見れば、三條橋上の拜跪も、決して怪むに足らぬ。又、實際かゝる事は、彦九郎としてあつた事を疑ふべくもない。彼は連年華洛拜皇居（頼春水の詩）の人である。

これを購ひ、清原宣條卿に奉ると、緑毛龜は、一種の祥瑞であるから、清原卿はこれを天覽に供した。主上深くこれを嘉賞したまはつた。此事は、杉山の彦九郎傳に見えてゐて、杉山は、これを評して、

正之、布衣羈旅の士を以つて、其志常に皇室を尊び、夷狄を攘ふにあり。其の天下を跋涉して、人心を激勵し、義氣を鼓動する所以のものは、未だ嘗て其の至誠に出でざるにあらざるなり。其の靈龜を得たる、人以て精誠の感ずるところとなす。

と云つてある。然し、此の傳は間違ひである。山本正誼の緑毛龜詩の序によると、寛政三年の春、近江の國高島郡の漁師



が、琵琶湖で緑毛龜を捕へた。子供の弄び物に手頃であるとして、これを親戚志水某に送つた。此事が評判になつて、見物人が群集し、一かどの見世物となつた。彦九郎もこれを見物し、歸りがけに、若林子寅の許を過ぎて、机の邊にありたる淵鑑類函を開いて緑毛龜の事を調べた。すると、其の文の中に、龜に毛あるは文治の兆とある。そこで、彦九郎は志水某に命じて、謹んでこれを飼はしめ、某卿を経て、遂に天覽に供し、これを御苑の池に放つたと云ふ。彦九郎は、これから有名な人々に依頼して緑毛龜の詩や和歌を求めたのである。其の圖によると、龜の甲は、淺黃花で、徑一寸九分、長さ二寸七分、治く緑毛を生じてゐたので、山本の緑毛詩には

五三

萬頃浸天陂 千年出底龜 何妨掛漁網 却得入仙池 甲起  
黄金屋 毛飄綠柳絲 凌波戲蓮葉 曝日向舟墀 同侶蛟龍  
喜 從行魚鼈嬉 神明蘊靈德 嘉瑞應昌期 應謝高山子  
微君不及玆  
とあつて、文治の兆を知りたる功勞を彦九郎に歸してゐる。事は甚だ瑣細であるけれども、如何に彦九郎が、世を王室隆盛の古に復さんことに銳意であつたかゞわかる。此の緑毛龜の事は、彦九郎によつて、當時名高くなり、龜の子の繪の盃を其の筋より人々に賜はり、猶漏れたる人には、龜の圖を印刷して施したものである。  
裴龜は、疱瘡の咒、ことに此の版は、みの龜を生けたる水

五七



五六  
 にて刷りし版なれば、上の文（龜有毛者文治之兆）龜の形  
 などは、小く切つて符の如く戴きてもよからん。みの龜の  
 盃を戴くことをもれたる人の爲め、施すものなり。  
 文治の兆も、とうとう疱瘡の咒になつた。然し、これを見て  
 も、當時に名高かつたことが知れる。  
 彦九郎は奇癖のあつた人として、其逸事も定めて多かつた事  
 と思はれる。然し、官途の人で無く、浪人でありたるが爲め、  
 正しい事實の後世に傳はつたものは甚だ乏しい。  
 水戸在の岩戸村に孝子乙吉なる者ありと聞き、彦九郎は、  
 其の家に至り、自ら禮服を着け、乙吉を上座にする、其の手  
 を取りて云ふには、二百年泰平の餘澤により、御身の如き孝

行なる者と相見るを得たるは、彦九郎の幸福である。江戸  
 に父の敵討したるものありと聞き、彦九郎は、郷里の上野國  
 より、馳せてこれに赴き、孝經一部を興へ、涙をこぼしてこ  
 れを奨勵した。  
 或る人、彦九郎に仕官せよと勧めたるに、彦九郎曰く、某  
 ととも仕官を厭ふものではない、たゞ其の事ふべき人が無い  
 ために仕へないのである。忠孝文武、天下あるを知つて身あ  
 るを知らざること、常陸の水戸義公、備前の新太郎少將の如  
 き名君出づるならば、如何なる卑き役にても、其の下に事ふ  
 ることを甘んずるのであると。  
 足利尊氏の墓を過ぎて、これを鞭つたと云ふ事は諸家の傳



に散見する。此事は、蒲生君平もやつた事で、勤王家の、然  
も矯激なる彦九郎の事であるから當然あつた事であらうと思  
はれる。けれども、逸事中、何處まで信すべきか、何の點が  
正確であるかは、容易に判断がし難い。割合に信すべき杉山  
の傳にも往々誤りがある。筑後久留米にて、行李中の日記を  
寸断して、これを水中に投じたと同傳に見えてゐるけれども、  
彦九郎の日記の其の大部分は、現存してゐるのである。逸事  
は又聞になると、次第に變形する。他人の逸事が混同するこ  
ともあるし、又、尾に鱧を付けて、誇大に吹聴される事もあ  
るし、又、全然形の無い事が誤り傳へられることもある。親  
炙した人の直話ならいざ知らず、云ひ次ぎ語り次ぎは、先づ

以て信用しない方が確かである。山陽の傳に、  
かるが故に、平時人の惡を見て、これを疾むこと仇の如し。  
一權人利を専らにす、中外愁怨するも敢て云はず。正之同  
志と涕を攬ひて曰く、噫、公上は百も知らざるなり。今故  
紙を接ぎて幟となし、山廟の門外に樹て、號召すれば千  
許人を得べし、豎子を誅するに於いて何かあらんと。聞く  
者、耳を掩ふ。其の後弊事悉く革る。一號令出づるを聞く  
毎に、喜び顔色にあらはる。  
と見えてゐるのは、田沼意次の弊政と、寛政の改革とを指す  
のであらうが、果して彦九郎が、かゝる事を唱道したであら  
うか。彦九郎の人と爲りから云へば云ひかねまじき事ではあ



るが、旁證は無い。又、同傳に、正之に或る要路の大名が、自家の過失を聞かんことを求めたるに、正之が、前年某所の兄弟が父の仇を復した、それを護送するのに、普通の囚徒と同様であつたのは、名教上に關する事大なれば、よろしく御注意ありたしと申した、すると其の大名は、彼に謝して、一時の指圖宜しからず、後來は慎むであらう、と云つたとある。これらも、事實果して如何であらうか。彦九郎の性質上から云へば、この位の事は、當然であるが、これも旁證の無い限りは、容易に信じ難い。

拙堂の傳に、彦九郎が笠置落城の事を物語り、かゝる天子に反抗する逆賊の如きは、其子孫必ず絶えるであらうと云つ

た、すると一生ありて云ふ、先生の言葉は甚だ中りません。私は笠置落城の際先登したる陶山の後裔であると、彦九郎大に怒り、之を叱して、汝の如き逆賊の胤は、我門を汚すべからず、とてこれを追ひ出したといふことが見えてゐるが、ちよつとありさうな事で、實際は信用し難いものである。鹽谷宕陰の傳に、倉成善次なる豊前の儒者が、彦九郎に不孝の事あるを人に語つた、彦九郎聞いて怒り、直に倉成の門に至り、返事次第によつては切つて捨てんとする、倉成其の意を知り、席を與へて諄々として其故を告げたところが、彦九郎始めて了解し、涙を流して之を謝したと云ふ記事が見える。卒直なる彦九郎の事であれば、悟れば直に自己の主張を捨てるに吝



ならざれども、之も何の邊まで信用すべきかは疑問である。

一一 南船北馬

彦九郎が其一生の間に最も歡天喜地の感に堪へなかつたは、  
縁毛龜獻上の際に聖天子の嘉賞を戴いたことである。

我を我と思召すかや天皇の

玉の御聲のかゝる嬉しさ

の一首で見ても、此ことが尋常一様でなかつたことが分る。  
又嘗て、

かしこまる七重の膝を九重の

都に年を送る嬉しさ

と詠じた。皇室京都、之れ彼が最も快きを感じる對象であつた。願くは其皇室をして神武の古に復したい、其京都をして王朝全盛の世に返したい。彼れ嘗て吟じて曰く、

遣 悶 作

生平慷慨幾時休 高位顯官非我求

義氣深憐首陽死 文才豈問祇都遊

霸謀隆盛偏堪惡 王道陵遲實可愁

何事朝廷當路客 共忘恢復悅風流

王道の陵遲は彼の最も愁ふる所、しかし其京都其朝臣に勤王忠誠の士乏しく、太平を謳歌して花鳥風月を樂しむものが多い。關東布衣の客が日となく夜となく憂慮する所を、却つて



天下のお膝元に於て對岸の火災視する。此も亦彼が傳道すべき中心地ではなかつた。しかし其山川は自然に城を作りて佳氣鬱々たる所である。彼が當初の素志は貫徹して、玉の御聲のかゝる身とはなつた。彼が心中の炎は更に紅團々を加へねばならぬ。

彼は熱烈なる尊王論の傳道者である。机上に論じ筆墨の上義を唱ふる傳道者ではなくて、自ら海内を跋涉して、親しく傳道する使徒である。彼れ自らの人格に接し、彼の口から親しく大義を唱ふるに於て、彼の傳道に意義があり、彼の傳道に生命があり、彼の傳道に大なる歸依者を得るのである。其の跋涉地の大略に至りては、杉山の傳に、

正之東西跋涉し、健歩人に過ぐ。其の平生齎らすところは重さ概ね甲冑一領に比す。蓋し軍に従ふものは、當に躬ら甲を擔ふべし、故に用ひて身體を習らすと云ふ。是より先き鄂虜數々蝦夷に往來し、邊海を窺窺す。正之深く之を憂ひ、躬自ら此地を歴視し、竊に虜情を探らんと欲す。庚戌(寛政二年)の夏遂に意を決して北游す。(中略) 正之、南部津輕を経て松前に至り、竟に蝦夷の境に入り、奔走累々頻に足力を極む。既にして忽ち回顧の志あり、乃ち松前より海を航し、風帆飛ぶが如く、三日三夜にして忽に中國に達し京に留ること數月。明年辛亥(同二年)京を辭して西海に遊ぶ。是歳三月、夷舶紀伊の大島浦に至り、又筑前及長門の邊海に



出沒す。(中略)正之西海に在ること凡そ三年、是に至り遂に京師に歸る。

とあり、菅茶山の傳中には、余二十歳ばかりの時、來りて一宿す。其話中古より王道の衰へし事を嘆きて甚しき時は涕流をなす、歴代天子の御諱山陵まで諳記して一つも誤らず。亂世には武者修行と云て天下を周遊するものあり、今治世なれば徳義學業の人を尋ねありくも、少年の稽古なりと思ひて、六十餘國を遊觀せんと志し、一冬裕衣一つを着て、露して試みしに、風をもひかざりしによつて出遊をはじめしなりと云ふ。(中略)此人備前の閑谷の學校に宿して、其學制規則などを尋しかば、

教授の人本一冊を出して示し、其翌早くかの寝たる所にゆきて見れば、彦九郎はなほ燈に對して其本を寫し、既に半頁ばかり残りたるをやがて寫し終りぬ。(又略)ある時領主の邸へ呼寄せて、彦九郎は百姓にて平生長き大小を横たへ、家業を勤めず、書物のみ讀むは不審の者として、門側の一室に押込めて數月の間置るに、懇意の朋友酒肴を携へ問來るもの虚日なし。或日大府の一有司の邸に召れて、其方何故に諸國を遊行し、名ある人を尋ねゆくや仔細あるべし、一々申上げよと命せられければ彦九郎、亂世には武者修行と云ふことの候由承候、今太平の御代に候へば、諸國に名ある人を搜し求めて、よき事を聞んずるにて候、其よき



事と申すも、忠孝の事より外にては候はずと申ければ、さらば此書を講釋せよと、論語を一巻出されけるに、彦九郎ちつとも臆せず、辯舌あざやかに講釋し終りけるによつて又もとの領主の邸にぞ下されける。

とある。柴野栗山の送序には、

高山仲繩、獨身劔に仗り、一錢を齎らさず、其郷の毛野を出で、秩父の高峰に登り、中山道より尾勢を横貫し、紀の所謂熊野將軍法師玉置の諸山を險降し、子守村に入りて太古の遺俗を訪ひ、攝より播に出で、山陽山陰より直に西北して雲伯を窮む。其の履むところ二千有餘里、三十有餘國、深山廣澤無人の境に出入し、樹根巖足に露宿し、視ること

猶康莊を行ひて夏屋に蔭するが如し。其の見るところの人は即ち忠臣孝子仁人義勇士より名卿大夫、賢守牧、才子、文人、博物智謀及び夫の僧道醫卜百工衆伎の徳、其術を以て世に名あるものと、汚ては博奕屠販、游俠角力、細にしては婦人孺子僕隸、苟くも人に殊りて、世に崎なるものは遠しと雖も必ず索め、一たび其面を見ずんば已まず、或はそれと歡すること累日、涕泣を垂れて別ると云ふ。

と云ひ、皆川湛園の送序には、  
一善行あるものを聞く毎に、窮陬僻邑と雖も、輒ち必ず往き求む。存するものは親しく觀察し、亡ぶるものは其實を詢ひ、皆詳に其の得るところを録して後還る。蓋し以て危



險を踰え絶岨を越ゆと雖も辭せざるなり。蓋し其弱冠よりして之をなし、今に至りて數十年、其足跡竟に已に天下に半し、而して其の之を求むるの志は未だ嘗て少しも怠らず、其の所以を問へば即ち曰く、傳に云はずや、百聞は一見に如かずと、吾之を觀て以て自ら勵まし、之を語りて以て人を益さんと欲するのみと。

と述べ、若槻敬の書には、

高山仲繩、千嶺を嶮とせず、萬里を遠しとせず、汎く古人を訪ひ、廣く好友を求む。壺々義に就き欣々善に勇なり、其質の剛、其材の髦、人みな以て甚だ及び易からずとなし、之を美めて奇士と稱するも亦宜なり。然り而して仲繩の由

るところは天を天とし、尊を尊とし、孝を孝とし、悌を悌とす、寔に皆恒常正直の道のみ。故に之を美むるに奇を以てするは、之を美むるに正を以てするに如かざるなり。蓋し儒風は激勵に乏しく、民氣に耿介寡く、視聽は苟且に慣れ、語黙は姑息に安じ、名の或は差へるは多からずとなさす。夫れ名正しくして後冠履其所を獲、規矩其實に副ふ。誠に風教を補ふを思へば、即ち豈それ名の正しきを尙ばざらんや。

と述べてゐる。忠孝節義は彦九郎の天性である。故に彼は忠孝節義其人あるを聞くと千里を遠しとせずして到り、自ら之に激勵され、又之を以て他人を獎勵する。しかし彼が南船北



馬日も足らざる其本来の目的に至ると、即ち尊王論の傳道である。若し尊王論の傳道を以て其旗幟となさば、彼は幕府政治の下に一日も其頭首を保つことは出来ぬ。忠孝節義を訪ふの名の下に彼は其傳道をなすつゝあつたのである。又忠孝節義と云ふことも詮じつめれば尊王賤覇と云ふことに歸着せねばならぬ。彼の名と彼の實とは一にして二にあらず、一致結合の妙諦を有してゐるのである。流石に彦九郎に見抜かれただけあり、水藩尊王攘夷論の急先鋒だけあつて、藤田幽谷は其祭文に於て、彦九郎の本領眞意を道破して遺憾がない。嗚呼、子、高尚の質を懷いて、魯仲連の人となりを慕ふあり、難を排し紛を解き、戰國の策士にあらずと雖も、世を

輕し志を肆にし、太平の逸民たらんことを庶ふ。能く王を尊び覇を賤むを知る、豈啻に當年の秦を帝とせざるのみならんや。囊中の装一錢なくして、副綬を彈じて以て津を問ふ。書は纒に以て姓名を記するに足りて、劍は身を防ぐに餘りあり。身は國に爵位あるにあらず、仕へずして乃心は朝廷、赤狄の北陸を蠶食して神州を窺窺するを聞き、其後世天下蒼生を害せんことを恐る。上下宴安、方に鳩毒に耽る。子獨り慷慨、命を受けず、私を以て行き、陽に浪客となりて山水に漂遊し、陰に國家のために虜情を偵察し、期するに衣冠禮樂の文物をして、被髮左衽の羶腥に變せざらしめんと欲す。豈云はん、封侯萬里の外一身富貴の榮を取



るを、杞人天地を憂ひて、葵は緯を恤まず、知らざるものは誣ひて狂名を以てす。

まことに彼は陽に放浪の客となりて、四方に飄遊し天下の志士と交り、其尊王論を傳道するに一意熱烈であつたのである。彼は筆の人でない。其の信する所を毫端に馳せて天下の士氣を鼓舞することは即ち能はぬ。彼は舌の人でない、壇上に立ちて、諤々の論議に一世を警むことは即ち能はぬ。又よしや筆の人であつたにしろ舌の人であつたにしろ、幕政の世に其論議を公にすることは許されぬ。彼は即ち其足を以て關山千里を東に西に跋渉し、熱烈なる情を以て人を動かしたのである。忠孝節義の至情なる彼は忠孝節義の事蹟に感憤し、到

る處に忠孝節義を語る。しかし其究極する所は尊王賤霸に行かねばならぬ。即ち忠孝節義を方便として、次第に其本音を鼓吹すると云ふ兵法を取つたのである。

高山子高山子	東山壯士氣翻々
七尺軀兮三尺劍	一箇行李在牛肩
天下山川躋攀盡	偃蹇日吟遠遊篇
行々鐵杖驅長蛇	懷中明珠照海天
自言四海皆兄弟	不愁鄉國隔山川
秋風先到白川上	真人紫氣滿關邊
關尹想像占來往	留得道德玄又玄
風塵俗物誰得讀	寶篆一字直十千



天下野人醜男子

相見笑談夜如年

天厨薦饌爲君供

玉液滾々對炊烟

座間割鮮肉如堵

樽前大杯酒似泉

醉中談孝同奇癖

尋問本朝孝子傳

人生高行誰不羨

與君同好亦何然

今日相逢今日別

可惜再遊已多愆

忘老一時意氣豪

鬢上毳々奈二毛

吁高山子高山子

天下要道屬君曹

草鞋如虎開雲霧

知君至德高山仰愈高

と、常陸天下野の人木村謙の詩を見ても、醉中孝を談じ意氣軒昂なる状を認めることが出来るけれど、其孝を談じ其忠を

説くの背後には、常に尊王賤覇の熾烈なる傳道があつたことを、看取するに難くない。

自ら行き、自ら訪ひ、自ら説き、自ら教ふる彼は、傳道者として最も成功したるものであつた。彼の人格に接し、彼の言論を聴き、彼の熱情に打たるゝもの、誰人か其尊王論に教へられざるものがあらうか。彼の行く處は即ち尊王論の伴ふ處である。是に於て火は到る處に點せられ、到る處に油は注がれて、終に後年の尊王攘夷論の活躍となつたのである。

一二 一去兮不復還

寛政三年の末に彦九郎は既に西國客次の人であつた。四年



元旦には熊本の碩儒蓑孤山翁の家塾にあつて、遙に帝闕を憶ひ、

四方山の霞長閑に春の來て

都の空に向ふ嬉しさ

の詠がある。又正月十三日時習館にゐて、都の釋典を思ひて、

天地の御代限りなく榮えよと

つくしの旅の中も忘れず

と、胸中に燃ゆるが如き尊王の熱情を吐露した。孤山は程朱

の學を奉じ、嘗て藩學時習館の教授となり、京攝の間に遊び

中井竹山、中井履軒、賴春水等の諸儒と交はつた。寛政二年

病に依りて職を辭し、養老俸を賜はつて、猶鬱として九州學

界の重鎮であつた。

彦九郎は又安野古溪堂、高本李順、同李倫等と交を結んだ。

斯くて熊本を發せんとするに臨み、孤山翁に寄する歌、

我れもまた丈夫なれば忍びても

別るゝ時は袖は濡らさじ

又高本李順に別れては

忘るなよ我も忘れぬ水底の

そこ意もあらぬ深き交

寛政四年二月二十二日、熊本を發して途すがら八代にある征

西將軍懷良親王の御墓に詣でて

一度や二たび三たび額きて



こぼるゝものは涙なりけり  
九州に於ける宮方の中心となりて、南朝掉尾の活躍をなされた征西宮は、彦九郎に取りて、如何に慷慨の情を湧かしめ  
たか、察するに餘りがある。

八代にては郷儒宇野子幹の家に宿し、二月二十九日津奈木村の老儒深水士蘭の宅に宿り、三月二日、此村に近き濱崎村に孝子長左衛門を訪ねた。其二十五日には伊集院から鹿兒島に着し、千石馬場の増田幸兵衛方に宿した。彦九郎の鹿兒島に赴くと云ふことは、既に同地の志士赤崎海門の許に通じあつたから、其夜海門は彦九郎を尋ね、四月二日には彦九郎が彼を訪問した。

海門喜で厚く之を待遇し、詩五首國風一を寄せて歓迎の意を表した。

上毛の國の平正之のぬし、千里のみちを遠しとせずして、  
とはれければ

旅衣はるゝとひしうれしきは  
包む袂にあまるとぞ知れ

彦九郎の返歌、

知る人の知るぞ嬉しきはるゝと  
尋ねし山のかひぞありける

又海門の詩に、

芝門邸舍高山伸繩訊訪、賦之以謝



君似園鶴 飄々冲紫氛 逢迎堪倒屣 意氣欲凌雲 未盡  
追歡興 其如斜照暉 預期魔水酒 一醉挹清芬  
翌三日には魔城の志士伊知地藤右衛門、東郷貞助、山下正  
助、上原彌九郎等は相率ゐて、此尊王論の傳道者を尋ねて來  
た。

彦九郎が此西南の遠國に來たのも、彼が大傳道を此地に試  
みんとしたからである。薩摩の地は由來健兒に富である。兵  
兒が尙武の氣に豊に、醇朴の俗なるは知られてゐる。彼の胸  
中には一個の成竹を有してゐたのである。芋焼酎を傾けなが  
ら、彼は薩南の健兒と談論してゐたのだ。筑紫日記に依ると  
其往來した健兒には、荒垣筑登之、平松幸助、摘木石見之助、

相良某、朴方寛、徳田直治、徳田直右衛門、小橋喜作等の名  
が見えてゐる。島津家の重臣島津兵庫も亦之に詩を寄せ、又  
物を贈つた。

しかし彼が成竹と信じてゐたのは、一の空想に過ぎなかつ  
た。現實とならずに、寧ろ彼を失望させた。薩南の健兒中彼  
を識るものもないではない。しかし他國人を國內に入れるに  
基だ嚴しかつた鹿兒島は、彦九郎に向つて、奇異の眼を以て  
之を見た。彦九郎が尊王論の鼓吹も僅かの反響あつたのみで、  
却つて後日彼の累をなすに過ぎなかつた。彦九郎の一生から  
云ふと、薩摩の訪問は大なる失敗であつたと思はれる。  
奇抜なる彦九郎は鬼界ヶ島に渡らんと欲して、之を薩侯に



請うたが許されぬ。乃ち一首を賦して悶々の情を遣る。

鬼界ヶ島に渡らんとして、國の守より許しあらねば斯くな  
ん思ひつゞけ侍りて

白雲を分けつつ来れば薩摩海

沖の小島に波ぞかかれる

赤崎海門、同情の念に禁へず、之に答へて、

赤城真人（彦九郎の赤城山を、赤城は彼が假に稱す）鬼界ヶ島

に渡らんと請ひたまひけれども許なければ、沖の小島に  
云々となんよみたまひし返し

あし田鶴の翼に乗りて通はなん

沖の小島に浪高くとも

彦九郎は遂に鹿兒島を去らねばならぬ場合となつた。五月  
十四日島津兵庫は、彼を大隅抱城の邸に招き、小宴を張つた。  
席に陪するものは赤城、伊知地、山下、東郷等十餘名の同情  
者若くは渴仰家であつた。此小宴は彼の爲祖道の宴であつた。  
然れども焉んぞ生別死別を兼ねるとは誰が思ひ到らうか。兵  
庫の詩に云ふ、

上毛高山奇士見訪

五月涼生樹竹中 邀君滿席穆清風 奇談妙論終無盡 應與

田駢天口同

兵庫は贈るに唐扇一函及袴を以てした。彦九郎は直に其袴  
を着し、



錦水先生の袴を云々

いざさらば我れ故郷に歸らまし

君が錦を送ると思へば

と詠んで其厚意を謝した。赤崎海門の歌

松園主人、赤城真人に馬のはなむけし給ひける時云々、

友鶴よ又此園に來つゝ啼け

あすはいづこに飛かはすとも

彦九郎の返歌、

不知火の翁に返す

飛び別れまたも逢ひなむしるしとよ

その友鶴の言の葉ぞよき

此他座中の面々いづれも詩を賦し歌を詠みて送別の得を寄せた。

鬱々として彦九郎は鹿兒島を出發し、途すがら霧島に登り、山麓の温泉に浴する事數日、尋で三郎山大口越を越え、肥後に入りて阿蘇山に攀り、肥前の島原柳河の城下を經、到る處に傳道を試みたが、到る處に容れられなかつた。其うちに彼は旅次に痰の病を獲た。筑後久留米在なる御井郡櫛原村の郷士森嘉膳の家に宿する頃には、既に病軀の人であつた。しかし彼は病苦に堪兼ねて其生命を自ら絶つの人ではない。當時彼は病の人ばかりでなく、嫌疑の人でもあり、又彼が薩摩に入りたるが爲に、累を蒙つた同志の士もあつた。彼の身邊に



は幾多の事情が纏綿したのである。杉山の傳には、

居ること數日、忽ち病むところあるが若し。一日齋らすところの日乗を出し、寸裂して之を水中に投ず。嘉膳驚いて其故を問ひ、且つ曰く積年の盡力一朝にして之を失ふ、豈甚だ惜むべからずや。正之曰く我れ亦之を愛惜するを知らざるに非ざるなり、然れども百事已む。況や此鶏肋何を深く惜むに足らん。嘉膳曰く今足下の爲すところを以て、後世或は疑うて不良の事となさば其れ何を以て之を解かんと正之即ち止む。嘉膳既に退く。須臾にして正之刀を抜いて屠腹す。嘉膳驚き見、問うて曰く何爲れぞ此に於てす。正之曰く我常に國家に報せんと欲し、其の忠をなし義をなす

所以のもの今不忠不義の事となる。已む、我が智の及ばざるなり、是れ天我を殺すのみ。幸に我が爲に天下の人に謝せよ。嘉膳曰く國に法あり、願くば子治療を加へよ。正之聽かず。嘉膳曰く、我れ子を館して、子自殺す。若し治を加へざれば我れ違法の罪、亦逃るゝ所なし、願くば子之を亮とせよ。正之之を許す。之を暫くにして、正之東方を指し問うて曰く、帝都及故國は此れか。嘉膳爲に東北を指示す。正之手を拍ちて再拜して、巖然端座し、談話平生の如し。既にして醫來りて之を視、吏來りて之を檢し故を問ふ。正之曰く狂氣するのみ。其郷貫を問へば、曰く上野新田郡細谷村と。是に於て問ふもの數ば、復答へず。吏乃ち正之



の齋すところの物を閲するに、毫も疑ふべきものなし。唯天下の名山大水勝區の圖畫及忠臣孝子の行狀、諸名家送るところの詩文あるのみ。曉に至りて正之竟に絶す。年四十餘、是歳寛政五年なり。久留米侯聞いて之を憐み、乃ち命じて新田の領主に告げ、其の貯ふるところの物件を封じて郷里に送還す。廼ち正之を府下の遍照院に葬る。正之既に死して、世其所以を知るなし。後數月自ら其墓下に死するものあり、其人狀貌魁偉、蓋し唐崎常陸介なり。唐崎も亦慨慷の士。正之初め其名を聞いて、未だ其面を識らず。一日聖護院法親王に詣り、一士人に遇ふ、骨相常に非ず。正之を見て曰く君は高山殿に非ずや。正之曰く君は唐崎殿か

と。因りて手を執りて相泣いて曰く天下の事何すれぞ此極に至るやと。卒に相與に結んで膠漆の交をなす。適々正之の死を聞く、豈亦感ずるところあるか。明年人あり墳に就いて之を祭る。即ち正之の叔父劍持長藏なり。正之子あり、名は義助、嘗て林祭酒の門に遊ぶと云ふ。や、其大略の要領を得てあるが、十分の要領とは云ひ難い。筑紫日記には寛政五年六月二十四日の條に

不濡山の時雨

晴れ曇る降りみ降らすみ神まして

ぬれずの山の時雨なりけり

養尾山の暮雪



白鷺の羽根をやこぼすとばかりにて  
養尾の山の雪の暮かも

の二首が載せてある。これをその絶筆として、翌々二十六日に屠腹したのである。而して其絶命は即ち二十八日の曉である、年四十七。久留米の蓮光院に埋めた。

彦九郎の死に就ては、人其所以を知るものなしと傳へられてゐる。山陽は曰く、

或は曰く、關吏の辱を受けて慙憤して死すと。關龍曰く吾れ數々人を罵りて之を試むるに、眞に我を斬らんと欲するものは獨り正之のみ。渠已に人を殺すに果なり、故に亦自殺に果なるのみと。又七 (豊前氏) 之を聞いて曰く、否々、

彦九郎は蓋し夢寐の中に感ずるところあるのみと。噫渠は夢むと雖も猶能く死するものなり。

と。蓋し多感激越なる彼は自らの爲に死したのでなく、人の爲に死したのであつた。最も彼を善く知つた藤田幽谷は「身を以て君父の死に殉ずる能はず、空しく劒鋒に伏して以て鮑魚の徒と歸を同うす」と惜である。彼は責任を思つて信の爲に自らを殺したのである。



高 山 彦 九 郎

古人に學べ 終

四

大正六年三月十八日印刷  
大正六年三月廿五日發行

古人に學べ

正價金壹圓四拾錢

著 作 者 笹 川 種 郎

發 行 者 伊 東 芳 次 郎  
東京市牛込區神樂町一丁目一番地

印 刷 者 高 橋 賢 治  
東京市小石川區久堅町百〇八番地

印 刷 所 博文館印刷所  
東京市小石川區久堅町百〇八番地



發 行 所

東京市牛込區  
神樂町一ノ一

電話番町五三七、六一七一  
振替東京一七一

東亞堂書房







文學博士 箕作元八先生著

## 西洋史話

菊判美本全一冊  
紙數約六百五十頁  
正價貳圓五十錢  
送費金拾貳錢

茫茫三千歲國興り人滅び草木茂り英雄出づ此の興亡張弛を記録したるものは歴史也、吾人泰西の史籍を繙く毎に、感懷禁すべからざるものあり、文學博士箕作先生の西洋史に於ける、人推して以て泰山北斗となす、今や縦横の健筆を揮つてこゝに屹然七百餘頁の大冊『西洋史話』を著さる、而も此の書や一事一人に就て、特に詳密の記述を以てすれば讀者は趣味津津の間に列國の興廢を目睹し得べし、宜なる哉發刊旬日にして既に初版數千部を盡したることや。

京都文科大學  
教授 文學博士 三浦周行先生著

## 歴史と人物

全一冊菊判美裝  
紙數約八百頁  
正價貳圓八十錢  
送費 十二錢

三浦博士は我國々史界の泰斗、就中其人物傳の研究に至りては、天下獨歩の觀あり、此の書は上古より近世に至るまで、各時代各方面に雄飛せし偉人數十人を拉し來りて、縦横に品騭せらる、筆鋒銳利ながら無人の境を行けるが如く泉下の英雄偉人は博士が筆頭に現はれて、個々躍動して其眞面目を發揮す、國史の研究者は云ふまでもなく、英雄を崇拜し、豪傑を欽仰し、更に先人の殘せし痕を忍ばんと欲するの士は、此の書によつて啓發する所蓋し多大なるものあらん、從來刊行の人物傳少なからずと雖も、其正確にして、且つ時代の反映を知らんとする者には、唯一の寶典として此の一本を推奨するに躊躇せざる也。



尾崎行雄・清水 澄・高島平三郎 三先生序  
淡水 高橋 立吉 先生著 (口繪多數挿入)

## 列傳體明治史

(日 本)  
新英傑傳

上製菊判美本  
五百二十餘頁  
正價貳圓貳拾錢  
送費 十二錢

明治大帝御在位中の大日本帝國は、實に世界史上無前の大發展大進歩を成し遂げたる時代なり、維新の鴻業に基を開きて西南の大亂に國內統一し、教育勅語の下賜によりて國民の向ふ所を定められ國會を開設し民論を聞き日清日露の兩役を経て國威いよ／＼揚れり軍事に政治に文學に教育に皆西歐の文明に國粹の美を加味して大成せらる、本書は人物中心主義を以て波瀾多き明治時代を叙す、筆力雄勁史實明確眞に空前の大著なり、前時代の活歴を知らんと欲するもの、宜しく本書に就いて、其全豹を會得すべき也。

法學博士 寬 克 彦 先生序  
文學士 中村 德五郎 先生著

## 我等の祖先

洋裝箱入頗美本  
全 一 冊  
正價壹圓貳拾錢  
送費 拾貳錢

アングロサクソンの子孫たることは英國人の誇りである、ゲルマニーの子孫たることは獨逸人の誇りである、況んや萬世一系の皇統を戴ける天孫人種の子孫たることは、我日本人の大なる誇りと自覺ではないか、斯くの如き國は世界に於て獨り我皇國あるばかりである、即ち皇國の根柢は、實に我等祖先が活動の大精神に由て確立し、此の大精神は大和魂となり武士道となり、永劫不變、天地と始終し、廣大無邊世界を包容す、我等は祖先の活動を知らねばならぬ、我等は祖先の事業を知らねばならぬ、祖先を知るは自覺の第一歩である、道德の根基である、修養の眞髓である、六千萬同胞は子々孫々に國民讀本として、必ず一本を家庭に備ふべきである。



江原素六先生 坪内逍遙先生  
矢野龍溪先生 德富蘇峰先生 序 角田浩々先生著

## 漫遊人國記

菊判美裝全一冊  
正價金 參圓  
送費 拾六錢

久しく關西文壇の重鎮として噴々の聲望ありし著者が、再び東都の文壇に復歸したる記念として、新時代の讀書社會に提供したる日本内地漫遊觀察記也、從來の名勝記、紀行文の舊套を打破したる新たなる人生地理學也、收むる所北海東北北陸山陰山陽畿内の各地に亘り、地理山水風景、古今人物神話傳説文藝哲學宗教英雄凡人紳商政治家草木禽獸等、盡く著者が縦横の筆に上り、洽博の學識と警技なる觀察眼とに觸れて、甚深微妙の意義を語り、讀者を延きて瞬時の間に多趣多方面の博識家と化せしむるは、真に大正文壇の一大驚異と稱すべし、請ふ一本を備へて坐ながら漫遊の人となり給へ。

福本日南先生著

## 元祿快舉真相錄

菊判 頗美本  
正價參圓參拾錢  
送費 拾六錢

著者卷頭に本書著作の用意を述べて曰く『曩に元祿快舉錄を修めて、之を世に公にするや、誤りて大方の鑑賞を博し、爾後義士傳の出づる其數を知らず、乃ち出づるに隨ひて之を讀むに、十中の七八は皆我著の套襲に過ぎず、當時我の疑問として世に遺せるものは、依然疑問の裏に葬り、前に我拋棄したる市井の妄傳、謬説を再び拾取して、點綴編を成す者、亦尠からず、茲に於て發憤更に史實の研鑽に従事し、凡そ見聞の及ぶ所は努めて材料を網羅し、其異同を辨じ其真假を正し、拮据二年にして爰に此編を成す』と、著者が義士に關する研究の深きは定評ある所、曩に元祿快舉錄を讀める士は勿論未讀の士も亦此の空前の大快著を備へて、以て家々子弟の發奮劑とせよ。



福本日南先生著

# 英雄論

洋裝美本全一冊

正價金 壹圓

送費金 八錢

豈色を好むのみを以て英雄となさん、豈人を欺くのみを以て英雄となさん、カーライル曰く『英雄の傳記は是れ全世界史の精髓也』と、世に興味深く、價值多きは夫れ英雄の言行事蹟に非ずや、文壇の巨豪福本日南先生、常に思ひを史上の成敗興亡に潜めらるゝの傍、上下數千歳間の大丈夫が偉勳鴻業の跡を大觀し、先づ筆を、何をか英雄といふに起し、神人的英雄、英雄の人心收攬術、英雄の風采、英雄の本領、英雄の得能、英雄の襟度其他の諸項に分ち、自在に古今東西の英雄を拉し來りて史實に考證し、逸話を博引し、滔々數萬言、宛然天より落下する電光の如く、火焰萬丈一讀人をして手に唾して起たしむるの概あり、當代に處してコンマ以上の人たらんと欲するの士は、速に此の英雄教の福音を聞け。



363  
106



終

